

---

# 俺よ、死んでも心をしっかりもて・・・ムリぽいけど

斬滅のザン & 食べられる野草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺よ、死んでも心をしつかりもて・・・ムリばいけど

### 【Nコード】

N9296M

### 【作者名】

斬滅のザン&食べられる野草

### 【あらすじ】

ひよんな事で死んでしまった高校生、伊達<sup>だて</sup> 晴<sup>はる</sup>は死後の世界で神様（変？）のせいで死んだ事を知りなんやかんや頑張る物語です。

初作品なので過度な期待して見て、「なんだよこれ、めっちゃつまんねーじゃん、作者死ねよ」とか「つまんな過ぎて、今にも死ねるわ」とかその他諸々の事情とか俺の許容範囲超えるんで見ないでください。

第1話死んで償え・・・・・・・・あ・・・・・・・・いや・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・死なな

初書き〃バカなのか俺？

第1話死んで償え・・・・・・・・あ・・・・・・・・いや・・・・・・・・ごめん・・・死なな

伊達 晴（以降、晴）「・・・・・・・・」

知らん天井だなー何処だろ？

目覚めるとなんかよくある？感じて白い空間に居た俺、こと伊達まさ・・・・・・・・ごほん、晴。

辺り一面真っ白で何だか・・・・・・・・「ここは、神の間と言って・・・・・・・・うぬんかんぬン・・・・・・・・君は死んだんだよ」とか言われるような場所に見える。

晴「さて、神（笑）を探してみるか」

起き上ると意外にしつかりした足場だった・・・・・・・・晴は経験値が上がった。【大地を踏みしめる】を覚えた。

晴「ん？なんか置いてある」

ふと足元を見ると紙切れがあつた。さっそく開いてみると、

『拝啓 伊達 晴様へ

私は神です。晴様に話がある・・・・・・・・グシャ』

晴「芋虫でも食って発狂死してる・・・この屑が」

なぜかむかついたので握り潰した。

？「ちょ、酷くない？」

急に後ろから声が聞こえ、振り返るとそこには見目麗しい・・・変態が居た。

晴「うぎゃあああああああ！！」　ゴスッ

”顔面”を殴り飛ばすと良い音が響いた。

？「ぐふっ！！」

晴「死ねええええええ！！」　ゴスッ

なんとなく追加のとどめで本気の蹴りを”顔面”に入れる。

？「きゃん」

晴「キモいーーーー！！」　ガスッ

本当に最後のとどめのパンチを”顔面”に叩き込む。

？「もっ、もつとーーーー」

晴「ぎゃーーーー！！」

二発目から反応がキモいぐらい、いやキモい。

？2「ちよつとあ・な・た？」

？「はい、ただ今ーーーー！！！！！！」

化け物が凄い勢いで妻？の下へ行く。

？2「これだからあなたは、分かっているんですか全く……」

「

化け物が綺麗な女性に怒られるシユールな絵が見れた。

30分後

？2「ホントうちの主人が失礼な事を」

説教を終え深々と俺に頭を下げ謝る女性。

晴「いや、こっちも被害無いですからお気になさらず」

？2「そうですか、ならいいんですけど」

なんでこんな化け物と結婚したんだろこの人？

晴「はい大丈夫です。それとつかぬ事を伺うんですけど、ここは何処なんですか？」

？2「ええつとここは……」

なぜかどもりだし先程の化け物を見やる女性。

？「それについては俺が話そう」

そう言つて真面目な顔になる化け物。

？「俺は神なんだ、そして俺の妻の女神だ」

ぺこりと女神さんが頭を下げる。

神「そして簡単に言うなら君はすでに死んだんだよ」

晴「へえー、そうなんですか」

神「案外返事が軽いな」

だつてこれが俺だもん。

晴「そうかな？¥¥」

神・女神「「褒めてない、褒めてない」」

晴「ええー」

むくれる俺。

晴「まあ、死んだんですね俺」

神「ああ、わしのミスで」

にこやかな笑みでそう告げる。

晴「死んで詫びろー!!」　ゴスッ

右のフックが左の頬を捉えて転がる神（屑）。

神「ゴハッー!!」

神（屑）に駆け寄り追加コンボの蹴りが”顔面”に入る。

ガスッ

神「グッハー!!」

そして”顔面”を踏みつけながら、

晴「ああん、舐めてんのかコラァァ、テメーのミスで俺死んでんだよ。何笑ってんの？」　グリグリ

神「い、痛いれふ」

晴「知るかカスが!!　命と痛みどっちが重いか知ってんのか!？  
アァァン」

今だに踏みつけたままキレる。

神「命でふ」

晴「知ってんなら、言つこと有るよな？」

神「すみま……」

晴「は？舐めてんの？それだけ？重いんだろ命は？」

神「ふえふえも、なにをふれば？」

晴「生き返らせるとか出来んだろ？神ならやってみろ。いや・・・  
”やれ”」

神「はい、やらせていただきます」

そして俺は転生した。

第1話死んで償え・・・・・・・・あ・・・・・・・・いや・・・・・・・・ごめん・・・死なな

作者「なんか微妙だな」

晴「微妙っーか、もう無理？」

作者「なにー、まだまだ行くぜ」　ガクガク

晴「もうお前のHPはゼロだ教会に行け」

作者「まだ追われねえー」

晴「字、間違ってんじゃないか!!」

これからできれば読んでください。  
ではノシ

第2話 ヤッホー俺二度目の誕生！！（前書き）

どうなるんだろ？

まあ、頑張るぜ！！

## 第2話 ヤッホー俺二度目の誕生！！

あの悪夢のような空間から……出れて無い！！

晴「で？俺の転生許可は承認されたの？」

なんか神（屑）の仕事部屋に踏ん反り返って居る俺が居た。

神「えつえとですね？参考に何処に行きたいんですか？」

神が俺に質問する。

晴「別に何処でも良いけど、恋姫とかマジコイとか……かくかくしかじか……とかかな」

神「結構あるね？」

だって健全なる一男子なんだからフツーだろ……

晴「でも？その健全な男子の人生潰したのはだ・れ・か・な」  
ギリギリ

神「ぎゃあああああ、痛い痛いよー、アイアンクロー死ぬー！！」

思いつきり顔面を潰れる一歩手前まで握る

晴「大丈夫、大丈夫、お前か・み”だから”さ」

1時間後

あれから少し落ち着き。

晴「で？OKなの」

神に少々苛立ちつつ質問。

神「うん、何とかOK」

そんなにギリギリみたいな言い方すんなや

晴「そんで、俺何処行くの？」

神「それはランダムにしたから僕にも分かんないんだよ」

そんなキモい顔して優しい男、装うなや・・・ムカつく

晴「じゃあ、さっさと送れよ。ここに居るとお前を殺したくなる」

神「あ、じゃあ何か願い事無い？できる範囲で叶えるよ？」

神は破格の条件を突き付けた・・・突き付けて無いけど・・・

晴「ん？そうだな、ん」

突然のことで考え出す。

晴「じゃあ、身体能力最強にしてくれよ。あと見たら完璧に真似するかどうかだ？」

神「OK、分かったよ」

神、当然のごとく了承する（軽くビツクリ）

晴「じゃあさつさと送れ」

神「じゃあ、送るね。次の人生は良い人生だと願うよ。バイバイ」

## 第2話 ヤッホー俺二度目の誕生！！（後書き）

作者「俺の精一杯だぜ」

晴「ホント使えねーよなお前」

作者「貴様！、斬滅してやる、首筋を差し出せ」

晴「戦国BASARAに感化されんな、ボオケ」ゴスツ

作者「ぐはっ、だ・・・だが・・・負け・・・ん・・・ぞ・・・」

晴「次回も生温かい目で見てくれよな」

### 第3話　なんかいきなり飛ぶぜ　（前書き）

いきなり原作を変えて申し訳ございません

でもなんかいきなりハードルが高い事に気づいてしまった

ホントに申し訳ございません

### 第3話 なんかいきなり飛ぶぜ

なぜかすげー飛ばされ16年ぶり？伊達 晴改め、東雲<sup>しののめ</sup> 晴でーす

あの神の間から早16年が経ち今の所普通に暮らす俺。

でもしっかりちゃんと転生した事がわかった……なんてったつて……

晴「孝、暇じゃねーこれ？」

そうなんと『学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD』の世界に来てしまった。

イヤー最初はさ、まさか違うよなー、とか思ったのが間違いだった。

もろ藤見学園の制服を見ちゃったんだもん。その後の止めが、我らがアイドルの宮本<sup>みやもと</sup> 麗<sup>れい</sup>が同じ幼稚園で真っ先にお友達になったぜ・  
・だって将来あんな美人でカワイイだぜ、その頃にお近づきになりたいじゃん！！

そして俺の隣で黄昏気味の少年、小室<sup>こむろ</sup> 孝<sup>たかし</sup>は、俺の友達で唯一無二の親友だ。

なぜか原作とは違く、女の子にコクって振られて落ち込んで居る・  
・らしい？

孝「だいたい、何で晴も授業に出てないんだよ？」

晴「俺は頭が良いからな」

決め顔で「フッ」と言う俺。

孝「この前のテスト、オール赤点ギリギリだったじゃねーかよ」

晴「グフツ、あ、あれは・・・そう、寝不足で調子が・・・」

孝「夜の9時にいつも寝るのに寝不足はないだろ」

こ、こいつ痛い所ばっか言葉の槍で突いて来やがって。

晴「・・・くそっ、良いじゃんか友達が心配なんだよ」

くそー、ハズ過ぎる／＼

孝「・・・ハハハ、よくそんな事言えるよな・・・でも嬉しいよ」

そう言ってまた外に目をむける孝と俺。

すると数人の教師が校門に向かうのが目に入る。孝も同じ様子だ。

孝「なんだ？あれ」

孝の目線の先を見ると、校門に体当たりする人影が見えた。

晴「（まさか、始まるのか？）なんかやばそうだぜ？」

その光景を眺め、いつの間にか寄りかかる体勢をやめ食い入る様子に様子をうかがう。すると人影が手島教師の腕に噛みつくのが見え、少し騒いだ後、事切れた様に動きが止まった。そして教師が手島に

近づく。

晴「おいおい、こりゃあやバいぜ」

孝「ああ、アレは死んでるみたいだな」

すると手島が起き上ると他の教師に食らいつき始めた。

晴「おい孝、この事、永や麗ひさしに伝えて逃げるぞ」

孝「わかった」

そしてついに絶望の幕が上がる。

**第3話   なんかいきなり飛ぶぜ   （後書き）**

作者「なんか短いかな？」

晴「短いんだよ、バカ」

作者「でもこれがおれの限界」

晴「マジでクオリティー低いな」

作者「だから限界だつて」

晴「こんなの見る奴居るのか？」

第4話 始まった地獄・・・弾ける青春!! (前書き)

タイトルは関係無いと・・・思う？

#### 第4話 始まった地獄・・・弾ける青春！！

あれから孝と別れて俺は学校の剣道場に居た。

晴「えーっと、木刀、木刀っと」

剣道部の男子更衣室に入り木刀を探す。なぜ木刀かは、聞くな。すると奥に木刀が何本か立てかけてあった。

晴「これで良いかな？」

その中でも特に堅そうな物を手に取り一振りする。

晴「うん、大丈夫そうだ！」

そう言つて剣道場を出る。

そして校内放送の音がなり、混乱が始まり生徒が逃げ出す。

晴「はあー、不幸だぜー」

俺の目の前に物理の木庭教師がゆっくりと近付いて来る。

晴「くそー、こばちゃんの授業好きだったのぬうい！」

木庭の頭を木刀で叩き割る。

晴「くそー、なんで現場に血が流れるんだー・・・まっいいや」

踊る大○査線ぱく言ってみるが・・・秋田、じゃなくて飽きた。

その足で技術室に向かう。

晴「俺、参上ー」

と教室にゆつくり入る。何、言葉と出方が合わない？ 俺は慎重なの！

晴「何も誰も居ないか」

原作通りにここに高城<sup>たかぎ</sup> 沙耶<sup>さや</sup>と平野<sup>ひの</sup> コータが来ると思うので待機する事にする。そこで和みの為に途中で買って来たウーロン茶を飲む。

晴「はあゝ、マジウマだぜ」

そんな感じで和んで居るとドアが開く。

沙耶「っ！！なにしてんのよ、晴！」

コータ「え！東雲？」

晴「ん？沙耶にコータか、無事で何よりだぜ」

2人ともなぜか驚く。

晴「狭い所ですがどうぞ」

沙耶「なにふざけてんのよ！」

晴「そんなに怒るなよ、軽いジョークだつて」

沙耶「今の状況分かってんの？」

晴「知ってるよ、何かゾンビみたいなのが居るんだろ？」

沙耶「知ってるなら、少しは慌てなさいよ！」

晴「慌てて事態が解決すんのかよ？そうじゃねーだろ、だから少しは落ち着け」

沙耶「うっ！わかったわよ」

コータ「東雲、凄いね高城さんに尻込みしないなんて」

晴「まあ、幼馴染だからな」

そう俺は転生して沙耶の幼馴染みになったのだ！！

沙耶「関係無いわよ！」

その後、沙耶がコータに原作通りガス式の釘打ち機を見せて武器を持たせると外に 奴ら が集まり始めた。

沙耶「ちょ、来てるじゃない、早く何とかしなさいよ！」

晴「ありゃー今はムリだろ、俺がカバーするからそこにある物全部  
鞆に詰める」

沙耶「なに、私に命令するの？」

晴「なんだよ？ここで一緒にご臨終するか？」

沙耶「分かったわよ！」

そう言つて俺は木刀を 奴ら に構える。沙耶は鞆に物を詰め込み  
始める、コータは鋸のこぎりで何か作業している。

晴「おらっ！邪魔だ！」

木刀で3人の頭を割ると後ろで パスツ と音がして 奴ら が倒  
れる。

晴「なかなかの腕じゃねーかコータ」

コータ「この位簡単だよ」

そのまま俺達は教室を後にすると沙耶の「？ 奴ら の生態実験」  
をした後職員室のドアの前で 奴ら との戦闘になった。

晴「コータ、援護頼むぞ」

木刀を下段に構え走り出す。まずは右の 奴ら の頭を割って行く。

コータ「了解！」

コータの威勢の良い返事と共に釘を 奴ら に打ち込む。

晴「コータ、弾はどの位だ!？」

コータ「あと少しで無くなる!」

沙耶「早く、詰め替えなさいよ!」

コータ「でも、居ますよ・・・後ろに」

そう言つて後ろを指さすコータ。

沙耶「ひひひひひひひひひひ!」

晴「沙耶!くそっ!」

俺は沙耶に向かって走り出す。すると目の前に 奴ら の1匹が現れる。

晴「邪魔だあああああああ!」

木刀でこめかみに一撃を叩き込み吹き飛ばす。

沙耶「は、晴」

コータ「マガジンが!？」

そして下に落ちた鞆を踏み沙耶が転ぶ。

沙耶「ッ！ハッ！！・・・寄らないで、寄らないで！」

コータ「高城さん！！」

すると沙耶は近くのトロフィーを投げつけるが 奴らは怯まず進む。

沙耶「来るな、来るなあああ」

そして奴らが噛みつこうと掴む瞬間その間に俺が割り込む。

晴「っ！！沙耶はやらせねーぜ、この俺がな！！」

そして 奴らは俺の腕に噛みつく。

晴「ぐあ！！」

沙耶「晴！！」

コータ「東雲！！」

すると視界に麗と孝と鞠川校医、毒島先輩が目に入る。

麗「っ！晴！！」

孝「晴うう！！」

そして孝達2人と毒島先輩の目が合い。

毒島「右は任せろ！」

孝「麗！」

麗「左を抑えるわ！」

3人は走り出す。毒島先輩が左2人を瞬殺、麗が右の1人をモップで貫く、最後に孝が正面の1人と俺の腕に食らいつく1人を殺す。

麗「晴！！！」

沙耶「晴！！！」

2人が同時に俺に寄る。

麗「いやっ！晴は、晴まで 奴ら にならないで・・・これ以上私を置いて・・・行かないで・・・」

沙耶「晴！いやよ、こんな私を庇って死ぬなんて許さないんだから！！！」

麗は泣き始め、沙耶は目に涙を溜め罵倒を浴びせる。

孝「おい、晴、まだ僕は落ち込んでるんだ。僕の傍でまた心配してくれよ！！！」

3人共ギャーギャーと言いたい事を言う。

晴「・・・ハハハ、大丈夫だって、ほら」

そう言つて制服の袖を捲くと籠手の様な物を見せる。

晴「大丈夫、 奴ら の齒は届いて無いから」

そう言つて3人に微笑みかける。

#### 第4話 始まった地獄・・・弾ける青春!!（後書き）

作者「なんか・・・酷い妄想だな今回？」

晴「まあ、お前の頭はいつもこんな感じだろ？」

作者「失礼な事、言っな、ちゃんと他も考えるよ」

晴「どうだか？」

作者「なにー、俺の頭の中覗くか、コノ野郎ー！」

晴「どたまかち割るぞ」

作者「やってみ・・・っぐへ」

第5話 あばよとっぁーん・・・なんか違う？（前書き）

いやー、人に見て貰えて評価貰うと嬉しいすねー

これからもご愛読のほどよろしくお願いします

## 第5話 あばよとっぁーん・・・なんか違う？

あの後直ぐに俺達は職員室に立てこもった。

晴「っ！！痛い、痛いっすー」

悶える俺、抑える孝、テキパキ・・・いや、偶に止まるが手当に勤しむ悪魔・・・もと言ひ鞠川校医、クスクス笑う毒島先輩と苦笑いのコータ、この状況で説教を始める沙耶と麗。

沙耶・麗「聞いてるの！！」

晴「はiiiiiiiiiii！！」

何だ・・・この力オス。まあそんな事があってこれからについてみんなで会議。ちなみに移動は原作通り遠征用のマイクロバスだ。

孝「僕達2人は家族の無事を確かめま、近い順にみんなの家を回るとかして、必要なら家族も助けて、その後は安全な場所をさがして」

そこまで聞くと俺はテレビに視線を向けると麗もテレビを見ていた。

沙耶「どうしたの？」

みんなもテレビに目を向ける。そこではニュースで 奴ら の出現を暴動と称して放送していた。そこには俺達と変わらない地獄が映っていた。その映像も途切れスタジオに映像が戻る。その後はアナウンサーが自宅から出ないように促した。

孝「それだけかよ、どうしてそれだけなんだよ!!」

孝が机を殴りつける。

沙耶「パニックを恐れてるのよ」

麗「いまさら?」

沙耶「今だからこそよ。恐怖は混乱を生みだし、混乱は秩序の崩壊をもたらすわ・・・そして、秩序が崩壊したら、どうやって動く死体に立ち向かうと言うの?」

麗「信じられない、たった数時間で世界中がこんなに為るなんて」

麗は後ずさりして俺の制服の裾を掴む。

お母さん、俺は幸せです by 晴・・・なんじゃこの威力、裾掴まれただけでHPがゼロまで持つて行かれただー・・・・・・ゴホンツ、失礼取り乱しました。

麗「絶対安全な場所、あるわよね?、きっと直ぐいつも通りに・・・

」

沙耶「なるわけ無いし」

沙耶が麗の言葉を遮る。

孝「そんな言い方する事無いだろ」

沙耶「パンデミックなのよ。しょうがないでしょ」

鞠川「パンデミック!？」

俺を含め数人が分からなそうなので沙耶が教えてくれる。

沙耶「感染爆発のことよ、世界中で同じ病気が大流行してるって事」

孝「インフルエンザみたいな物か？」

孝が思いつく例を出す。

沙耶「1918年のスペイン風邪はまさしくそう、感染者が6億以上、死者は5千万になったんだから。最近だと新型インフルエンザで大騒ぎになったでしょ」

鞠川「どちらかと言うと、14世紀の黒死病に近いかも」

沙耶「その時は、ヨーロッパの3分の1が死んだわ」

・・・全くからんぞ、何語だ？

晴「どやって病気の流行はおさまったんだよ？」

鞠川「いろいろ考えられるけど、人間が死に過ぎると大抵は終わり

よ。感染すべき人が居なくなるから」

コータ「でも、死んだ奴はみんな動いて襲って来るよ」

毒島「拡大が止まる理由が無いと言う事が」

鞠川先生が思いついた様に言う。

鞠川「あ、これから暑くなるし、肉が腐って骨だけになれば動けなくなるかも」

毒島「どれくらいでそうなるのだ？」

鞠川「夏なら20日程度で一部は白骨化するわ。冬だと何カ月も掛かるけど・・・ともかくそう遠くない内に・・・」

沙耶「腐るかどうかが分かったもんじゃないわよ」

晴「何で？」

なんとなく目を丸くする感じで首を傾げる。

沙耶「うつ！／＼／＼、うつ、動きまわって人を襲う死体なんて医学の対象じゃないわ。下手すると何時までも」

毒島「家族の無事を確認した後どこに逃げ込むかが重要だな。兎に角、好き勝手に動いては生き残れまい・・・チームだ、チームを組むのだ」

晴「了解すっ」

毒島「出来る限り、生き残りも拾って行こう」

孝「はい」

晴「よっしゃ、行くぜ！」

まずは、職員室を出ると 奴らが居た。コータの援護で手前の2人を倒す。近寄ってきた奴を孝が吹き飛ばし脱出が始まる。

毒島「確認するぞ、ムリに戦う必要はない。避けられる時は絶対に避ける」

沙耶「連中は音にだけ敏感よ。それから普通のドア位なら破る位の腕力があるから、搦まれたら食われるわ、気を付けて」

そこまで言うと呼び声が耳に届く。

晴「聞こえたでござる、我らの助けを呼ぶ声が―」

みんな  
「  
「  
「  
「  
「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
「  
「  
「  
「  
「

晴「なんだよ、行かないのか？」

沙耶「ふざけないでよ」

晴「いや、決してふざけた訳では、つて、早く助けないと」

そのあと階段にいた4、5人の生徒を救出、噛まれた人も居らず俺達と一緒に行動する事が決定した。そして、原作でも難関の正面玄関に到着した。

毒島「しかし困った。このまま校舎の中を進み続けても襲われたとき身動きが取れない」

麗「玄関を突き抜けるしかないのね」

毒島「高城くんの説を誰かが確かめるしかあるまい」

みんな「「「「「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
」  
」  
」  
」  
」

みんなが俯く。

晴「んじゃ、俺が行くよ」

俺は階段から重い腰を上げると階段から見える外を見た。

孝「なっ！晴より僕が行く」

麗「晴が行くより私が」

毒島「私が先に出た方が良いな」

やっぱり原作通りみんなに止められる。

晴「いや、俺が行きますよ。先輩も麗も女の子なんだ、そんな役目

は負わせられない」

2人の顔が少し赤くなる。

晴「孝も、お前はもしもの為に居てくれ」

孝の肩に手を置く。

晴「それに、俺は沙耶を信じてるからな」

沙耶「なっ／＼／＼／」

二カッとみんなに笑いかける。

そして玄関に向かって音を立てずに向かう。目の前を 奴ら が横切るが反応が無い。

やっぱ、原作見たいに見えて無いらしい。だから足元の靴を取り遠くに投げる。すると意外に大きな音が鳴り 奴ら が一斉に向かう。

そのまま玄関のドアを開けてみんなを誘導する。そして、ここ俺は思い出す。最後の生徒が音を鳴らして走るはめ・・・ゲフン、襲われる事になる。でも時すでに遅し、音が鳴ってしまった。

孝「走れ！」

孝の声にみんなが走り出す。

沙耶「何で声出したのよ。黙っていれば手近な奴だけ倒して、やり過ごせたかもしれないのに！」

その後ろに 奴ら が迫るのを吹き飛ばす。

晴「はいはい、いちゃつくなく、あんまし声出すなよ、相手さんが襲って来るぞ？」

沙耶「いちゃついて無いわよ!!」

晴「うおっ、そおすか？」

麗「あんなに音が響くんだもん、ムリよ」

コータ「っ!・・・どんどん増えて来る!」

孝「話すより・・・走れ!、走るんだ!」

孝を先頭に置いて走り出す。その後をみんなが追いかける。

そんな中俺は後方で 奴ら を食い止める殿しんがりをしていた。粗方片づけて前を見るとタオルを首に掛けた生徒を見つける。

晴「おらっ、ホントに邪魔だな。さっさと休みたいぜ」

生徒「あ、ありがと、ハハ同感だね」

晴「さっさとこんな所出る為にバスまで行くぞ。そうだとタオル外しとけ、それ掴まれたらENDだぜ」

生徒「え、ありがと」

彼は首のタオルを投げ捨てる。

晴「そろそろ行くぜ、俺が援護するからバスまで走れ」

生徒「う、うん、でも君は？」

晴「大丈夫だ。そんな事より自分が生き残る事を考える。……  
今だ、行け」

彼は走り出すのを見送ると木刀を構えて 奴ら を倒して行く……  
・粗方片付けると俺もバスへと走り出す。バスの近くに着くと孝  
と毒島先輩が居た。

晴「おらっ、孝、みんな乗ったか？」

孝「ああ、後は僕達だけだ！」

晴「2人共さっさと乗れ」

そう言つて俺達はバスに乗り込む。何か先生がわたわたしている、  
そして孝がドアを閉めようとすると助けを求める声がする。そこを  
見ると3年A組の紫藤と生徒数名がこっちに向かって来る。

麗「……紫藤……」

鞠川「行けるわよ！」

孝「もう少し待ってください」

鞠川「前にも来てる、集まり過ぎると動かせなくなる」

孝「踏みつぶせば良いじゃないですか」

沙耶「この車じゃ、何人も踏んだら横倒しよ」

孝「んぐぐ」

孝が飛び出そうとするのを麗が止める。

麗「あんな奴助けること無い」

孝「麗、何だってんだよいったい」

麗「助けなくていい、あんな奴死んじゃえばいいのよ」

そして紫藤達が車に乗る。

孝「静香先生」

静香「いきます」

鞠川先生はアクセルを踏んでバスが走り出す。校門に近付くと 奴らの数が増えるがそれを轢き殺して俺達は藤見学園と言う地獄を抜け出した。

第5話 あばよとっぁーん・・・なんか違う？（後書き）

作者「長かった〜久々に疲れた〜」

晴「普通じゃねこの位、お前がただサボってただけだろ」

作者「そんな事・・・無いとは言えない」

晴「所詮その程度って事だろ」

作者「死ねー・・・ゴハッ」

晴「ふー、次回もみてくれよー、じゃーな」

作者「感想・・・待ってま・・・す・・・ガクッ」

第6話 「俺がこの世界の神になる」・・・このセリフなんか厨二病じゃない？

タイトルの言葉デスノートの夜神 やがみ 月の言葉で、らいつ聞いた時に思った  
感想です。

でわでわ、本編をどうぞwwwwww

第6話 「俺がこの世界の神になる」・・・このセリフなんか厨二病じゃない？」

藤見学園を出た直後に紫藤がリーダーが必要だのとほざき始めたその時の麗が孝に言った言葉が気になった・・・「後悔するわよ、絶対に助けた事を後悔するわよ」・・・俺は少し眠りに着いた。

俺は誰かの声で目覚める。

金髪「だからよー、このまま進んだって危険なだけだつてば！、だいたいよあ、なんで俺等まで小室に付き合わなきゃならねんだ！、お前ら勝手に街に戻るって決めただけだろお！、学校中で安全な所を探しやあ良かったんじゃねーのか！？」

暗男「そうだよ、どこかに立て籠もった方が、さっきのコンビニとか」

そこまで言うバスが止まり静香先生が運転席から顔を出す・・・ぐううう、頭打ったー

静香「いい加減にしてよ、こんなんじゃ運転なんて出来ない！」

静香先生の胸がかなり揺れてらっしゃる、しかも怒っている筈なのに可愛い。

金髪「んだよ」

毒島「ならば君はどうしたいのだ？」

金髪「くっ、気に入らねーんだよ、こいつが気に入らねーんだ！」

そう言つて孝を指さす。

孝「何がだよ、俺がいつお前になんか言つたよ」

金髪「てめー！」

金髪は孝に殴りかかる、それを俺が鳩尾にボディーブローを入れると金髪は倒れ込む。

晴「吹いてんじゃねぞ、ボケが、学校で安全な場所に居れば良かっただあ、自惚れんなよ、このバスのエンジン掛かつてる時点でどっか行くのは決まってるんだろが、それを、後から必死に乗り込んで来たのはテメーだが、俺達の気まぐれで助かったくせして、デカイ面して、孝が気に入らねー、とか言ってるじゃねーよ、カスが」

と金髪に吐き捨てる様に言う、そこに紫藤の拍手が鳴る。

紫藤「実にお見事、素晴らしいチームワークですね小室君 東雲君 あー、しかしこうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっていますねー、やはり、リーダーが必要なですよ、我々には」

沙耶「で？、候補者は1人きりつてわけ？」

紫藤「私は教師なのですよ、高城さん、そしてみなさんは学生です、それだけでも資格の有無ははっきりしています、私なら・・・問題が起らない様に手を打てますよ」

晴「勝手に1人でリーダーごっこやってろ、これからは、自分の力

で生きて行かなきゃならないんだ、俺はこんな親の七光ヤローがリーダーなんて認めねー」

そう言い捨てる助手席から外に出ると麗も付いて来た。

孝「麗、晴」

孝が助手席から呼ぶので振り返るとそこにはバスがスピードを出して迫るのが見えた。

晴「っ！、孝！、バスが迫ってる！」

孝「えっ！？」

孝が中に戻り静香先生に伝える。

晴「麗、トンネルに入れ！」

麗「うん」

俺達2人はトンネルに走り込むとギリギリで倒れたバスに引かれずに逃げ込めた。

晴「くっ、孝！、無事か？」

毒島「東雲君、大事ないか！」

晴「毒島先輩ですか？、こっちは大丈夫です！、みんなは？」

毒島「みな無事だ！、っ！くっ」

晴「警察で、東署で落ち合いましょう！、午後7時に！、今日はもう無理だから明日のその時間で！」

そのまま俺は振り返り麗とトンネルを走り抜けるとその先は土手でそこで少し息を整えると。

麗「きゃっ！」

尻もちをついた麗にヘルメットを付けた 奴ら が迫る。

晴「おっ、らああああ！！！」

首の付け根辺りに木刀を叩き込むと吹き飛ば、そいつに木刀を向け言い放つ。

晴「なに俺の女に手出してんだボケ、殺すぞ……ん？、もう死んでるか？、でも動いてるし……うーん」

麗「////////」

晴「それより、ほら、行くぞ麗」

俺は麗に手を差し伸べる、それを麗は笑顔で手を取り立ち上がる。

麗「街まで歩き？」

晴「いや、さっきの奴、ヘルメ被ってたからバイクがそこら辺にある筈だろ」

そう言つて辺りの土手を探すと下にあった、それを持つて俺達は土手に上がりエンジンの調子確かめる。

麗「免許もつてたけ？」

晴「よく歌にあるだろ、盗んだバイクで走り出すって、それと一緒に無免許上等」

麗「なによ、それ、フッフ」

そのまま俺達はバイクに乗り走り出す、麗が嬉しそうに強く抱きつく顔が印象に残った、いやでも、あんな可愛い顔で抱きつかれたらびーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー……すいません取り乱しました、なんか放送禁止用語が多々ありました。

そのまま暫く走り続けると、バイクを止める。

麗「誰も、いない」

晴「みんな逃げたか、死んだか」

麗「死んだらみんな、奴らになるじゃない」

晴「たぶん、追いかけて居たんじゃね？、逃げた人達を」

麗「ん、晴、あれ」

麗が指さす方向を見るとパトカーがのフロントが見える。

晴「パトカーか、でもなんであんな所に居るんだ？」

麗「見回りとかじゃ無い？」

晴「まあ、行つて見るか」

バイクをそこまで走らせる、そこには後ろにトラックが突込んでひしゃげてたパトカーと死体の警官が居た、それに近づく。

晴「多分、拳銃とか何か無いか調べよう、そっちの奴頼む」

麗「うん、わかった」

晴「有つたのはこれだけか」

警察に一般に支給される弾倉が回転式の拳銃と3段ロットに手錠と弾が5発があつた。拳銃と弾は俺が装備、残りのロットと手錠は麗が持つ。

晴「まあ、妥当だな、んじゃ行くか。げっ、ガソリン切れ掛けてるし」

麗「近くにガソリンスタンド無かつたっけ？」

晴「そうなのか？、じゃあ行つてみっかな」

そして俺達はバイクでガソリンスタンドを目指す、その後ろに奴  
らが迫る事を知らずに。

くそー、堪らんぞこの胸の感触――――、ぴ――――――――

第6話 「俺がこの世界の神になる」・・・このセリフなんか厨二病じゃない？」

作者「なんか最初のチート設定が意味をなさない」

晴「下手だからな・・・もともと素人にはムリだろ」

作者「五月蠅いぞ、貴様など俺の手でいくらでも改造出来るんだぞ！」

晴「このキャラお気に入りの癖に」

作者「くそー憎いこの男が憎いー」

晴「でもホントにチートばく無いよな」

作者「でもこんな感じで続けて行くぜー」

晴「こんな作者（片腹痛い）ですがこれからもよろしく願いします」

## 第7話 夏の甲子園は見てると意外に興奮する（前書き）

春さんの感想により。

これからセリフの前の名前は書かない様にしたいと思います。

タイトルはなんとなく思いつきで書いてみました。

では、本編をどうぞー

## 第7話 夏の甲子園は見ると意外に興奮する

俺達は少し走り続けると明りが灯ったガソリンスタンドを見つける。

『お、あつたぞ』

「これで、ガソリンは大丈夫ね」

バイクを止めて気付く。

『なに！、新型だー』

「……どうしたのよ？」

『いやなんか、セルフ式で、金は学校に置いて来たままだから金無くて』

「お財布、鞆に入ればなしで私も持っていないの」

『そっか、じゃあー仕方ないからパクるかな、麗も一緒行こう』

「えっ、でもバイクこのままだと誰かに取られるかも」

『バイクより、麗が捕まったら危ないだろ』

「うん／＼／＼／」

そのまま2人で休憩所にあるバーコードリーダーのボタンを押すが開かない、近くの椅子で打ち壊す。そこから6万円ほどを麗に預け

2千円を持って給油ノズルの場所へ行くすると男が飛び出してナイフを俺に向ける。

「にーちゃん、良い彼女、連れてんじゃねーか」

『はあー、で？、何、ナンパですか、好きだねおっさん？』

「うるせー、にーちゃんこのバイクとその女、俺に寄こせ」

『バカじゃねーの、麗もバイクも勿論、金も命もお前に一つだってヤル物は無い、失せる！』

「ああ、ざけんなよ、このバイクぶ壊すぞー！」

『ギャーギャーうるせな、さっさと失せねーと、テメーの命奪うぞ』

俺は木刀を構えると男が後ずさる。

『ナイフと木刀、どっちが有利かアンタにも分かるだろ？、麗、ごめんけどガソリン入れてくれ』

「わかった」

「晴、終わったよ」

『わかった、じゃーな』

そのまま俺達は走り去る、 奴ら が来る前に。

『麗、そろそろどこかで休もうぜ』

「でも、先輩達と約束が」

『多分今日までに着くのはムリだ、だから今日は休んで明日の為に寝ておこう』

「うん、わかった、でもどこで休むの？」

『それは大丈夫、近くに前、住んでたじーちゃんの家があるから』

「そうなんだ、でもお爺さんの家の鍵は？」

『それも問題無いよ、家を空ける事が多かったからスペアキーは置いてある筈だから』

そして家に着き、家の中に入り布団を敷いて寛ぐ。

『ここからなら、橋まで一直線だし、塀も高いから 奴ら が入って来る事もないから安心して眠れる筈だ』

「晴のお爺さんの家があつて良かったね」

『ホントは別荘見たいにポンポンいろんな場所にあるんだけどね』

「晴のお爺さんて何してたの？」

『確か、原油会社の社長だったり薬品会社の社長とかパイロットの機長に・・・なんか挙げたら切りが無いよ』

「お爺さん、凄い人なんだ」

『ただ、ハチャメチャなだけだと思うけど』

「それでも、凄いよ」

『ハハハ、ありがと、そろそろ寝よう、おやすみ、麗』

「うん、おやすみ」

そのまま俺達は眠りにつく。

今日だけでいろいろあった。 奴らの出現に地獄の時間……  
そして親友の、永の死、

でも永は最後まで人間で在ろうと頑張った、その結果、永は屋上から自分で飛び降り

た、孝も初めは止めた。それでも永は人間で有る事が誇りで、人に苦しさを押しつけ

ない為に自分で飛んだ、晴はこの事をまだ知らない、でもわかる晴は、永の事を褒め

る、誰よりも友達を大事にするから。そして脱出した後、私はバスを降りる気だった、紫

藤となんか一緒に行動するなんて嫌だから、でも晴は私の考えが分かるかのように紫

藤に罵倒を浴びせバスを自ら降りた。その後を私は追いかけた。そして孝達と別れて

トンネルを抜けると 奴らが私に迫る。それを晴が蹴散らして行った。言葉が私の思い

を強くする、私は晴が好き、昔から私が危ないと必ず助けてくれる、でもまだ告白はし

ない。晴から言うまでこの気持ちはまだ伝えない。いつか絶対言わせてみる。

麗  
S  
i  
d  
e  
E  
N  
D

第7話 夏の甲子園は見てると意外に興奮する（後書き）

作者「まあまあの出来かな」

晴「最後結構きつかったぞ」

作者「俺もきついかになって思ったけど、大丈夫じゃね？」

晴「ぜんぜん無事じゃ無い」

作者「でも、これが俺のクオリティー」

晴「死ね」 ガスッ

作者「ぐぼっ」

晴「これからはちよくちよく番外編とか書くと思っぜ、よろしくな  
！」

作者「俺、ふっく、ぐぼっ！」 ポキッ

番外編 思い出はあの空に消えた・・・なんか臭いセリフだ（前書き）

この前話が短いので付けたい見たいな感で

なんとなく番外編を書いてみた。

番外編 思い出はあの空に消えた・・・なんか臭いセリフだ

「ほら、晴、早く来なさいよ」

『ムリ言うな、前が見難いんだ、もっとゆっくり歩け』

ある昼下がりの男女二人の光景、もとい、俺と沙耶の奴隷と主の関係とも言つべき光景が街の人の目を引く。なぜこんな事に為ったかと言つと、昨日の夜に遡る・・・

『・・・おい、なんでそうなるんだ』

受話器を耳に当て電話の主、沙耶に問いかける。

「だから、この前授業サボってその言い訳したの私なの、だからそのお詫びに明日買い物に付き合ってたっていつてるの」

沙耶はなぜか怒った口調で俺に言う。

『だからあれは仕方なくさ・．．んんっん、休んだんだ仕方ないだろ』

ボロツと本音が出る所で咳払いをしてごまかす。

「今、本音出そうだったじゃない。そう、なら先生に何してたか・．ばらすわよ」

電話越しの筈なのに目の前に沙耶のニヤケた顔がチラつく。

『セコツ、ゝゝゝ、くそっ』

「明日１０時に迎えに行くから起きてなさいよ、じゃあおやすみ」

「はいはい、じゃな」

そして今に至る。現在１２時半を過ぎた所で、俺は靴や服、その他アクセサリーの入った箱や紙袋を抱えて沙耶の後ろを追いかけている。

『沙耶、そろそろ腹減ったからどっかで飯にしようぜ』

「大丈夫よママに良い店予約して貰ったから」

驚愕する、なぜ驚くかと言うと、小学校の高学年の時に一度食事に誘われた時に1品うん十万する店に招待されて困った事を思い出す。

『沙耶、聞くがそれって、上流階級が行く店じゃ無いよな』

「大丈夫よ今回は私も確認して大丈夫だったから」

『大丈夫かよ』

『大丈夫じゃなかった』

ホントビックリだわ、お前ら庶民がこんな所居て良い場所じゃねーよ。

「なによこの位普通じゃないの」

『俺の許容範囲超え過ぎてるよ、もう一杯一杯だよ、何なの俺なんかしたか』

頭を抱えて頂垂れる、その視界の端に沙耶の悲しそうな顔が映る。

「……………」

『・・・・・・、ほらとつと食って行くぞ』

「え、でも嫌いなんじゃない」

『もう慣れる。これからはもう嫌がらんからさっさと行くぞ』

沙耶の頬が緩み可愛い笑顔が一瞬見える。

「ふっ、ふん当り前よ」

『くそー、もう来たくねー』

先程の店から少し離れた公園のベンチに腰掛ける。

「あの位でだらしないわね」

『沙耶みたいにあんな所に行き慣れてねーから仕方ねーだろ』

荷物は沙耶の父親の組の人が家に運んで今は手ぶらで休んでいる。

『でー、どうすんだこれから?』

「・・・・・・・・」

驚いた顔で俺の顔を見る。

『まだ昼過ぎだぜ、時間まだあるだろ、これからが本番だぜ』

俺はさも当たり前のように沙耶の顔を見つめ返す。

「何よあ、当り前でしょ」

沙耶は嬉しそうに顔を赤らめてそっぽを向いてしまっ、そんな沙耶を見て苦笑いをしたあと手を掴んで走り出す。

『ほら行くぞ』

そのまま俺達は隣町の遊園地に動物園、ゲームセンターほかいろいろを楽しんで帰った、その帰り道で・・・

「今日はありがと、ちょっと楽しかった」

後ろを向いていないのでちゃんとした顔は見えないが、沙耶の顔が

容易に想像できるのは長い付き合いからかそれとも俺が沙耶に気があるからなのか今の俺には分からない。でも今はこんな気持ちも良いと思える事が何だか嬉しい。そんな感じで家の前の門に着く。

『ここまでで良いよな、じゃあまた明日学校でな』

そう言っただけ俺は沙耶と別れた。この数日後にすべてが終わってしまう事を俺はまだ気付いて居なかった

その日の帰り道、暗い夜道に桜が散って綺麗で何かを予感させるこの気持ちは……一体なんだろう……



第8話 眠い時は眠ればいいさ・・・その後は知らんが（前書き）

どうも、今日も更新に勤しむ作者です。

なんかネタが無いので読者の皆様のリクエストがあって作者が暇で書けたらジャンジャン書くつもりです。

なので時々で良いのでリクエストしてください。

では本編をどうぞ！（今回も短いかも（-|-:-:））

## 第8話 眠い時は眠ればいいさ・・・その後は知らんが

『ふっ、ふあああああ』

俺は縁側で朝日を浴びながら大きな欠伸を零し体を伸ばす。

『うっっ、これで体は大丈夫だな。麗は・・・まだ寝てるのか』

縁側から振り返ると布団に包まり寝ている麗がいた。

『かわいい顔で寝やがって』

麗の隣に腰を下ろし麗の寝顔を見る。ほんの少しだけ幼さが残るが学園内で上位に入る美少女、だが心のどこかで留年した事が・・・待てよ、紫藤に対する麗の態度、あれは確かな嫌悪があった。ここでの一つの仮説がたつ。紫藤が何らかの手で麗を留年させたのだとするとあの態度や反応が納得いく。紫藤のヤロー、次会ったら覚えてるよ。そして麗の頬に手を置く。

「ん・・・晴」

『へえ・・・れ、麗、こ、これはだなそのー・・・えーと』

麗が突然起きた事に驚く。紫藤と麗の事について考えていて気が付かなかった。

「おはよ」

『・・・ハハ、うん、おはよ』

彼女の微笑みは何だか俺の心をぽかぽか暖かくさせた。

『そろそろ、出発する・・・ぞ・・・』

麗が起き上がると、俺は咄嗟に振り返る。

「どうしたの」

『い、いや、その・・・制服に着替えてくれ・・・』

そう麗に今の格好は・・・裸シャツだったからだ。麗の服は血が付いていたからこの家にある筈の俺の着替えが”なぜか”シャツしかなく、やむなく貸した・・・ちなみに、ちゃんと部屋は分けて寝た。

『よし、行くぞ』

「うん」

その後、麗の着替えが終わりバイクにまたがり走り出す。

暫く走り続けるとだんだん街中が騒がしくなる。そして大通りに差し掛かるところで止まる。そこは酷い惨状になっていた。そこかしこで車やバス、タクシーが炎上、人が 奴ら から逃げ惑う。極め付けに武装したヤクザや精肉店の店員が 奴ら を笑いながら殺している。

「無茶苦茶ね戦争みたい」

『戦争より酷いかもしれねーな。ここに居たら危ない、合流場所に急ぐ、突っ切るぞ』

バイクを走らせる。すると先まで 奴ら を殺していた人達がこちらを向きショットガンや銃を向けて撃ち始める。バイクのナンバープレートが弾け飛ぶ中、何とかそこを抜け出す。

「どうして、私達は 奴ら じゃないのに」

あきらかに敵意がある行為で麗が驚く。

『頭に血が上ってるんだろ、俺達も一緒だろ』

「・・・私達と、同じ・・・」

そのまま走り続けると大橋が見えるが、その先は渋滞で直ぐに進めそうにない。そこで右に曲がる。

「何、大橋は真っ直ぐじゃない」

『大橋の方見てみる、あれじゃいつ渡れるか分かんねーから』

バイクを止め大橋を指さす。麗は大橋に目を向けるとその状況が直ぐに分かった。

『おんべつ橋に向かって沙耶達と合流しよう』

そしてバイクをまた走らせる。

沙耶 side

「マジやばいわよ」

「なにがだ」

小室には意味がわかってないらしい。後ろで紫藤が私たち以外の生徒を洗脳している。

「確かにな、あれではまるで新興宗教の勧誘だ」

毒島先輩が私の意見に賛成するが少し違う。

「“まるで”じゃ無くて”まんま”その通りよ、話を聞いている連中

を見てみなさい。宗教カルト紫藤教の始まりを目にしているの、私達は」

「道がこの有様ではバスを捨てて逃げるしかないな。なんとかおんべつ橋を渡って東へ向かわないと東雲君との約束がある」

先輩がここまで晴との約束を重視するには何か理由があるのかしら、意を決して聞いてみる。

「ん、随分と晴のこと気にするじゃない。自分の家族は心配じゃないの」

先輩は思考顔をやめこつちを向く。

「心配だが家族は父一人だし、国外の道場にいる、つまり今の私にとって東雲君との約束以外に守るべきは自分の命だけなのだ」

「うぐっ」

「そして父からは、一度した約束は命に代えても守れと教えられた」

ニコやかな微笑みが直視できずに目を反らす。

「へええ」

「すごい父親ですね」

そこで鞠川先生が話に加わって来る。

「みなさんお家はどこなのか」

「小室とかと同じおんべつ橋の向う」

するとヲタも話に加わる。

「ああ、僕も近所に両親いないんで、高城さんと一緒ならどこでも最後の私に着いて来たい発言がキモくて引いてしまう。そのまま平野の家族の事を聞いた、なんだか古いキャラ設定にツッコんでひと時の癒しがあった。

「で、どうするの、私も一緒に行きたいから」

その言葉に少しびっくりする。

「いいの」

「私はもう両親居ないし、親戚も遠くだし、こんなこと言っちゃいけないけど、紫藤先生あんまり好きじゃないの」

それにみんな笑ってしまう。そして私たちはこれからの事を決める。

晴、生きててよ。じゃないと恨んでやるから。

沙耶 side END

第8話 眠い時は眠ればいいさ・・・その後は知らんが（後書き）

作者「なんかsideの話結構難しいー」

晴「なんか結構ガタガタだしな」

作者「くそつ、なんかネタ転がってねーかなー」

晴「俺がここで死んだら次行けるぞ？」

作者「バカ野郎、まだお前のストーリーのエンドはまだ先だー!」

晴「どうせ碌な終わりじゃないだろ」

作者「そそそそんなわけなないだろ」

晴「ボロ出まくりだ」

作者「まっまー、次回もよろしくー」

晴「何終わらせてんだ」 ゴスツ、ドガツ、バキツ

**第9話 冷たい物を大量に食べても腹を壊す確率は低いかも！（前書き）**

お気に入り登録件数が日に日に増すことに嬉しさを覚える作者です。

この頃作者の作品が人気がある事が不安です。

でも、みなさんが呆れず読んでくれる事を願って更新頑張ります。

では本編をどうぞ！

## 第9話 冷たい物を大量に食べても腹を壊す確率は低いかも！

俺達はおんべつ橋に着くが、そこも大橋と同じで規制されていて直ぐに渡れそうにない。

「ここも同じね」

麗が橋を見ながらつぶやく。

「どうする他の橋を試してみる」

『たぶんムリだ。それじゃ規制してる意味が無いから、だからまだ孝達も渡ってないはず。だから少し上に行ってバスを探してそのまま合流した方がいいと思う』

俺達がもし最短ルートで来たとしたら、静香先生達は遠回りして別ルートで来た筈。最短で来てもこの感じならまだ橋は渡れてない筈だ。

「そうね、探して・・・」

急に発砲音が耳に入る。

「っ、銃声」

『いや違う、でもこの音どこかで聞いた事がある・・・そうだがコータのガス式の釘打ち機の音だ。麗、行くぞ、掴まれ』

バイクを走らせると音が近くなる。橋の下に車両運搬トレーラーが

見える。

『麗、舌噛むなよ』

そう言うとバイクのスピードをだんだん上げる。

「ちょっと、晴」

そのままトレーラーに乗り上げ橋に向かって飛ぶ。見事着地と同時に数匹の 奴ら を轢く。すると麗がバイクから飛び降り 奴ら にモップの柄で倒し孝の援護に向かう。

『コータ』

バイクに乗りながらコータに拳銃を投げると俺が横を通り過ぎたギリギリで発砲する離れ技を披露する。

「double tapだぜ」

そのままコータの前を通り過ぎると沙耶と静香先生の前の 奴ら を後輪で轢き飛ばし毒島先輩のもとに向かう。

『毒島先輩』

俺は手を出し先輩の手を掴んで先輩を軸に回転する。その遠心力を使い先輩を投げ回転した勢いで 奴ら を吹き飛ばす。

「すっい」

「粗方片付いた様だな」

周りには 奴ら の姿を無い事を確認する。

「手強かったわね」

「あんたは邪魔しかしてないでしょ」

先生の呑気な発言に沙耶がつ込む。

「先生」

「あらあら宮本さん、土偶ね、東雲君も」

麗が先生に飛びつく。先生「土偶」ではなく「奇遇」ではないでしょうか。

「とこのす大橋もダメだったんだな」

毒島先輩が大橋の事を聞いて来る。

『ええ、行き場無しって感じです』

「ならばこそ、無事で何よりだ東雲君」

『毒島先輩も』

するとむくれた沙耶が割り込んで来る。

「わ・た・し・はっ」

『分かってるって、そんなにむくれるなって』

沙耶の頭を撫でる。なんだか先輩と麗の視線が俺の手に注目する。

「晴、無事で何よりだ」

『孝、お前も無事で何よりだ。コータも・・・』

「晴、どうしたの、どうしたの、予備弾は、これ警察で配備されてるスミサンドウェッソンのM37・・・」

「道路が封鎖されているのでバスから降りたが渡河する方法を見つけないでいる」

今はさっきの状況から時間が経ち橋の下で状況確認する。

「川は増水してるし、上流に行っても無理でしょうね」

「じゃあどうすれば」

先輩、沙耶が渡河する案を出し合う。

『今日はムリだろ、どっかで休もうぜ』

「ちょ、アンタ、少し案を出さなさいよ」

沙耶に怒られるが正直な気持ち、そこに先生が手を挙げる。

「東雲君の言う通り、今日はもうお休みにした方がいいと思うの」

「お休みって」

コータが呟く。コータ俺も思うぞ流石に呑気過ぎると言ってやりたい・・・人の事言えなーけど。

「あのね、使えるお部屋があるの。歩いてすぐの所」

「彼氏の部屋」

沙耶が呆れた感じで言う、すると先生が慌て始めながら弁解する。

「ち、違っわよ。女の子のお友達の部屋だけど、お仕事が忙しくていつも空港とかに居るから、鍵を預かって空気の入れ替えとかしてるの」

沙耶とコータが先生の顔を意地悪顔で見詰める。なんか先生の格好が目につく。

「マンションですか、周りの見晴しは良いですか」

コータが質問をする。

「あ、うん、川沿いに建ってるメゾネットだから、直ぐ傍にコンビニもあるし。あ、後ね車も置きっぱなしなの、戦車みたいな、こ

「んなのよ」

先生が手を広げて大きさを表現するがいまいち掴めない。

「確かに今日はもうクタクタ、電気が通ってる内にシャワーを浴びたいわ」

沙耶が髪を掻き上げながら言う。

「そっそつですねー」

そしてコートは沙耶に蹴られる。

「このスケベ」

『んじゃ、先生と確認に行ってくる。静香先生乗って下さい』

俺は先生を呼びバイクのエンジンを掛ける。

「あ、うん」

乗ると先生が”なぜか”強く抱きつきその豊満な胸が背中に当たる。その時俺は何か突き刺さる視線を感じた。

そして俺達は場所の確認を済ませみんなで先生の友達の家に着いた。そして家の前に止められたハンヴィーに驚きつつも中に居る 奴ら

を倒し一時の安息を得た。ここで俺達が初めて攻めにでた事は疑問に為らなかつた……

「楽しそうだな」

ブスツとして不機嫌そうに孝が呟く。

「セオリーを守って覗きに行く」

コータがカギ穴に針金の刺して弄くりながら言う。

『今行つたら確実に死が待ってるがな』

本棚にある本を手に取りペラペラ流し読みをしながら俺は言う。

「っ、俺はまだ死にたくない」

孝とコータは今2つある謎の金庫を物色して1つを開けて2つ目に取りかかっている最中だ。

「これで何も入って無かつたら、頭痛いな」

「入ってるよ、弾薬はあつたんだから、絶対に」

「まあ良いさ、行くぞ」

孝達がバールで金庫をこじ開けるように体重をバールに乗せると金

庫がこじ開けられる。その拍子で2人がこける。

『なんかみつけたら教えてくれ、他の場所探して来る』

そう言つて階段を下りて行く。なんかコータがハイテンションになつてゐるのが声が聞こえた。

『なんかねーかなー』

部屋を隅々までみて回ると何かに躓き扱ける。

『ぐわっ、つててー、ん？』

その扱けた原因を見ると不自然な細長い木の箱があつた。

『なんだこれ、えーと、なんか凄いもんみつけー』

それをもつて階段を上がつてコータのもとに行く。

『おーい、コータこれみつけたんだけどー』

「89小銃ー、自衛隊で採用されてるアサルトライフル……」

『ふーん、下でマガジンてつ言うのか、みたいな物も見つけたぞ』  
黒くて少し曲線のケース見たいなのを渡す。

「それは自分で弾込めてね。ほらそこにあるから」

『へーい。ん、どうした孝』

「いや今、外がヤバい状況なんだよ」

『あ、孝』

「へっ」

すでに遅かった。魔の手が孝を捕まえる……静香先生だけど、そのあと先生が酔った勢いでキス魔になり孝とコータが襲われた。

「晴く〜ん」

なぜかその魔の手が俺にも伸びる。艶やかな格好で近付きハグ、甘美な吐息が耳を撫る。そして風呂上がりシャンプーの良い匂いが鼻を撫る。そして火照った唇がだんだん近付いてくる。

「ん〜」

『しかた無いですねほら、ちゅっ』

そして俺は先生の唇に自分の唇を合わせる。最初は先生も驚いていたが後からにこやかに眠り始めた。そのまま先生をお姫様抱っこする。

「は、晴、お前結構、大胆だな」

顔を赤くしてぎくしゃくしながら聞いて来る。

『そうか、女性からキスを求められたらしてやるのが男だろ。俺、先生寝かせて来るから行くから、見張りよろしく』

そのまま下に降りる、と目の前に麗が居た。

「なにしてるのよ」

なぜかご立腹の様子 of 麗さん。

『いやゝ、特に何もー』

すると麗が近付い来る、すると。

「わぁー、晴が3人いるー」

かわいらしい微笑みでそう言って来る。

『はぁ』

なんだか麗まで酔っているみたいだ。

「いきなり増えたー」

と言って尻もちをつく麗。

『酔ってんのかよ』

「だって疲れちゃったんだもん。たった1日でなにもかも可笑しく

なちゃうし、お父さんと連絡も取れないし、永も死んじゃうし、うつ、……うつく……ひつ……ひつ」

そう言つて泣き出す麗。ひとまず静香先生を寝かしにリビングに運ぶと沙耶もソファで寝て居た。はがれた布を掛けなおす。

『良い夢を』

喉が渴いたのでキッチンにある冷蔵庫に向かう。中にはカニ缶やお酒、酒の摘みなどがあつた。その中でオレンジジュースを持つと先輩に声を掛けられたので視線を向けると……裸エプロンの先輩が料理をしていた。

『へえ、えつえええ』

「どうした」

『いやつ、どうしたも何もー』

「あつ、ああー、これが。合うサイズの物が無くてなー。洗濯が終わるまで誤魔化して居るだけだが、はしたなさ過ぎた様だな、すまない」

なぜか謝られる俺。この状況で襲われる事を想像していない様だ。

『いやつ、そんなこと無いんですが、先輩あのーとても綺麗です』

「あ、ありがとう」

先輩は顔を赤くして俯いてしまう。その沈黙が破られる。

「ねえー晴ー、聞いてよー、晴」

麗が階段から顔を出して俺を呼ぶ。

「見てやった方がいい。女とは時にか弱く振舞いたいものだ」

『先輩もですか』

そんな疑問が口から出てしまう。

「ふふ、友人には冴子と呼んで欲しいよ」

『はい、冴子さん』

笑顔で名前を呼ぶと先輩の顔が赤く見えたのは気のせいだろうか。  
そして麗の元に向かう。

その後は麗の愚痴をオレンジジュースを飲みながら、飲ませながら、話を聞くと目に涙が溜まり始めた。

『ほらっ、麗おいで』

俺は涙目の彼女が堪らなく愛おしくなり彼女を抱きしめ。彼女は俺の胸に顔を埋め（うず）泣き始めるそんな彼女が顔を上げる。その彼女の唇に深いキスをする。そして1度唇を離すがもう一度キスをする今度は唇が触れるだけのキス、そしてだんだん気分が高揚する・  
・だけど・・・

『ここまで、これ以上は抑えが効かない』

「ふふっ」

すると犬の吠える声が聞こえる。

「晴・・・外で女の子が襲われてる」

そしてまた俺達の安息は中断させられる。

この壊れた世界はまだ俺達を窮地に追いやる

そしてまた俺達は地獄に放り出される事になる

第9話 冷たい物を大量に食べても腹を壊す確率は低いかも！（後書き）

どうもーみなさん本編いかがでしたかー

面白かったのであれば幸いです、今回はすこーし苦戦しました。

晴と麗の関係とこれからの展開がかなり難しいです。

でも頑張りたいと思います。

これからも作者とこの小説をよろしくお願いしまーす！

ではまた次回ー！ー！

## 第10話 夏にホラー映画は必需品かも（前書き）

どもー作者でーす、更新も進んで10話目に突入でーす。

これからもジャンジャン更新頑張ります。

それでは本編です！

## 第10話 夏にホラー映画は必需品かも

『がんばれよヒーロー』

俺は孝に拳銃を渡しながら送り出す。

「止してくれ、俺はヒーローなんかじゃないよ」

『それもそうだな、頑張つてこい親友』

ハイツタッチをすると孝はバイクにまたがり走りだした。

「何の騒ぎ」

『ん、俺達は人だつて確認出来ただけだよ』

沙耶は分からない顔をしていたが俺と冴子さん、麗は理解できて笑っていた。

『よし、孝が帰って来るまでに逃げる準備だ』

そしてそれぞれ行動に移る。

「平野は」

準備を終え居ないコートを待つ。

『上じゃね』

「つたく、ニブイんだか、凄いんだか・・・」

そこにコータが銃と弾を抱えて現れる、それを見てみんなが啞然とする。

『さてどうするよ、つても孝を迎えに行つて逃げる以外無いけど』

「そうね、小室を助けて、川の向こうに脱出」

沙耶の提案が出されそれにみんなが頷く。

『それじゃ、行きますか』

そしてみんなハンヴィーに乗り込みエンジンが掛かると孝に群がる奴らに向かつて走り出す。

「うわっ、いつぱい」

先生がわたわたし始める。

「と言っても逃げるわけにはいかないんだから」

「『とっ、げきいっ』」

俺と沙耶の声がハモリ車が 奴ら に突っ込みながら、孝のが向かって来る塀の近くに車を止める。

「ちょ、どこ触ってんのよ」

『え、いやどこもってわけでもないけど』

突撃の勢いで沙耶と麗の方に倒れ込む。その時にいろいろと触ってしまった。麗が機嫌が悪そうに俺を睨む。

「川向こう行きの最終便だ、乗るかね」

「もちろん」

車の上で先輩と孝がやり取りをする。そして俺達はその場を後にする。川に向かう途中、俺と孝、麗、冴子さんは疲労から少しの仮眠を取った。

気持ちよく寝て居ると急に激しい痛みが頬に走る。

『にぎやああああああ』

奇声をあげて俺、起床、すると目の前に麗が不満そうにこつちを見ている。まだ頬が痛い。

『はい、はい、でふ』

そう言つと麗は手を離してくれる。ジンジンする。

「いいご身分じゃない」

『なに・・・が・・・へっ』

俺の膝で冴子さんが幸せそうに寝て居たらしい。寝ぼけ顔の冴子さんがこちを見る。

『あのゝ、ヨダレが垂れてます』

冴子さんは一瞬で意識がはつきりして口元を拭う。

『孝起きろ』

テンパっていた俺は孝の耳を引っ張ると一発で起きた。でもかなりの間転げ回って居た。

「バカやってないでさっさと降りなさいよ」

そして俺は外に出るともう川を渡った後でもう朝だった。俺は川にタオルを持って行く。

『くはゝ、気持ちー』

顔を川の水で洗う。水がとても冷たく感じた。みんなの居る場所に戻ると孝にコータが銃の打ち方を教えている所らしい。

「一度聞いたって分かんないよ」

丁度孝がコータの話を聞かずにどこか行こうとする。

『おいおい、そりゃないだろ、ちゃんと打ち方聞いとけて』

「晴、俺にそんなのムリだよ」

『これから、武器に頼るんだ面倒ごとを後に回すな』

「……、はぁー、分かったよ」

その後、孝はちゃんとコータの話を聞いてちゃんと理解している。

『なあ、これはどう扱うんだ』

俺はウロウロしていた時に見つけたアサルトライフルを持ち出す。  
その後コータ先生の銃の扱い方を聞いて使い方を理解した。

「小室どうしたの……っ」

『ん、どうしたんだ、2人……と……も……』

振り返ると着替え終えた女の子組が居た。

「あははは」

「うふふふふ」

「わん」

孝、コータ、ジークの順で声も漏れる、ジークは昨日女の子、も  
と言い希里ありす、ありすちゃんと一緒に助けた？犬で名前はコー  
タが付けたい。なんでもアメリカ軍がつけた零戦のアダ名らし  
い。その後は土手の上の安全を確認して車を移動させた。

「これからどうするの」

先生が窓から首をだす。

『ここからは沙耶の家が近いから、まずは沙耶の家だな・・・だけ  
どさっ』

「わかってるわ、期待はしてない」

俺は沙耶の頭に手を置く、そして俺達の行先は決定した。

『くっ、ここも、居やがる、左だ、左』

目の前には 奴ら が道を徘徊している。

「何なのよ、東坂2丁目に近付くにつれて 奴ら が増える一方じ  
やない」

そして角を曲がると目の前に 奴ら の壁があった。

「このまま押し退けて」

沙耶が先生に言う、麗が何かに気付く。

「だめ、だめよ、停めてええ」

奴らの向こう側にワイヤーが張ってあった。だが停まれるわけもなく、なんとか車体を横にして何とか車にそこまでの衝撃は無かったがタイヤが滑ってタイヤがロックしている。コータが何か先生に言うが耳に入らなかった。車が走り出すと今度は急停止した。すると体が浮いて麗と共に落ちる。その時に麗を庇って俺は腰をボンネットに打ちつける。

『かはっ……んぐっあ』

肺の酸素が打った時に押し出されて、まともに力が入らなかった。

「晴、くっこの」

麗が飛び降り俺に迫る。奴らを倒す。孝も車から降りてショットガンを打ち始める。先輩も木刀で応戦し始める。

『ん、ぐっ、はあはあ』

俺は力を入れてなんとか壁に寄りかかるがそれ以上の力が入らない。そのまま俺は意識が無くなる。



## 第10話 夏にホラー映画は必需品かも（後書き）

みなさんどうでしたでしょうかー

ご都合全開な感じで書きました。

最後ら辺とか作者が思いつきを書くときと酷くなりそうだったのでボツにしました。

でも後悔がちょっとだけあります。

まあこんな感じで更新していきます。

次回もよろしく願います!!

## 第11話 薬とかつて結構いい匂い

孝 s i d e

「はあ」

あの絶望とも言える状況から1日が経つ。晴が車から落ちてすぐ俺達は助けようと行動した。でもすでに 奴ら によって囲まれた中、晴を守りながら戦うには無理があった。そして諦めた時に高城の母親に助けて貰った。

その後は高城の家・・・いや、屋敷で俺達は疲れを癒している。だが不安がある。晴がまだ起きないのだ。落ちた時に背中と頭を強く打ち付けたらしくまだ意識が回復しない。

（たくつ、さつさと起きろよ、バカ）

そんな事を思いながら俺はありすちゃんと先輩と会話を楽しむ

孝 s i d e e n d

俺は何かの怒鳴り声で目が覚める。たくつ 誰だ・・・よ・・・待て

確か俺は車から落ちて倒れたはず。何で生きてんだ、誰かに助けられたのか。

俺は寝ている体を起こそうと力を入れる。だが瞬間に背中に痛みが走る。

『~~~~~』

でも俺は痛みを耐えてベッドから起きてドアに壁を伝って移動する。そのまま外に出ると隣の部屋から話し声が聞こえる。俺は壁を使ってその部屋のドアを開けるとそこには今まで一緒に行動してきた仲間が居た。でも俺が部屋に入って来た事に気付かず、ベランダで話す沙耶と孝に目が向いている。

沙耶が何か早口で言っている。

「もちろん娘のことを忘れていたわけじゃない、むしろ一番に考えた。さすがよ本当に凄いわ、さすがアタシのパパとママ」

沙耶がなぜあんなに取り乱してるのか分からない、でも止めなくちゃいけないと直感した。だから背中の痛みを耐え走って沙耶を抱きしめる。

『沙耶、まずは落ち着けて、みんな分かっているから、落ち着け』  
頭を撫でながら沙耶の耳元で子供をあやす様にゆっくり優しく言い聞かせる。

「は……る……はる……」

沙耶はポロポロと涙を流し崩れる様に座り込む。

『よしよし、よく頑張ったね』

その後は落ち着きを取り戻した沙耶が顔を赤くしてみんなにわたわた説明をする。その後なぜか矛先が俺に向き説教、その時、沙耶だけでなく麗と冴子さんも加わり酷いことになった。何であんなに怒られたかはよく分からないままだった。

その後、沙耶が自分の父親の話、憂国一心会の話、その父親が今の現実を避難してきた人に実演して見せ付けた。

『何話してんだよ』

俺は沙耶をあやす時の無茶が原因でベッドに寝ている。隣にはありすちゃんがいって会話をしているので暇では無い。

するとコータが部屋から飛び出していく。その後に冴子さん、沙耶が部屋からいなくなる。すぐに孝がベランダから出てくる。

『何か手伝おうか』

「お前が俺に説教でもするってか」

鬼の形相でこつちを睨む。

『腑抜けたお前の顔面ぶち抜く位の無茶はできるぜ』

すると孝は、我に返る。

「そんな無茶、出来ないくせに」

苦笑いで孝が言う。

『親友が道間違えたら直すのが友情だろ』

「なんだよそれ、でもありがとう」

『さつさと悩み解決してこい』

そう言うつと部屋から出て行く孝。

「ありす、コータちゃんとおはなしする」

『わかった、コータを頼むね』

頭に手を置くと元気な返事と共に部屋から駆け出して行く。色んな感情が渦巻く中、俺達は自分を見失わずに生き抜かなきゃいけない。そんな現実をこの平和な時に出来た俺達はまだ良かったのかもしれない。

第12話 結果も努力も関係なく決断の方が大事かも（前書き）

今回のタイトルは本編に若干の関わりがある感じにしました。

今回は作者の妄想を入れて書いたので、沙耶がキャラ崩壊してるかも…

大事だよね、みんなこれからの更新見なくなるとか無いよね……

……

取り乱しました、では本編をどそっ！

## 第12話 結果も努力も関係なく決断の方が大事かも

ありすちゃんが出て行った後、俺は窓の外の空を眺めながら歌を口ずさむ。

「なんていう歌なの」

するとベランダから静香先生が入って来て、歌を聞いていたらしい。

『昔、ばあちゃんが歌ってた歌で名前は知らないんです』

「今、おばあ様はどこに」

『もう居ないんです。じいちゃんと一緒にポツクリ逝っちゃいました』

「あ、ごめんなさい」

先生は気を遣って謝る。

『気にしないでください、本当の祖父母じゃないんで』

「どう言うこと……っ」

先生が途中まで言いかけると大声が聞こえる。

『外ですね、行ってみましょう』

そして俺は先生の肩を借りて声のする方へ向かうと沙耶の父親がコータに何か言っている所だった。

「俺は、俺はまた元通りになる、元通りにされてしまう。自分に来ることがようやく見つかったと思ったのに」

コータは銃を抱え涙と鼻水でグチャグチャの顔で言う。それを沙耶の父親が聞き返す。

「出来ることとは何だ」

その質問に答えたようとコータは必死だが声が出ない。するとそこに、

「あなたのお嬢さんを守ることです」

孝がコータの前に歩み出ながら言う。

「こ、小室」

「小室……なるほど君の名前には覚えがある。沙耶とは長い付き合いだな」

「はい、ですがこの地獄の始まりから沙耶……お嬢さんを守り続けて来たのは平野と東雲です」

コータは孝と沙耶の父親の会話を聞く。するとありすちゃんもコータに抱き付く。

「彼の勇氣は自分も目にしております、高城会長」

「アタシもよ、パパ」

そしてその場にみんなが集まる。そして沙耶の父親は納得して頷いて去ろうとすると部下が駆け寄って耳打ちをする。すると沙耶に何かを任せて去って行った。

「……って分けて誰か一緒に来て」

避難してきた人がまだ現実を理解していなくて勝手に話をしているらしく、それを鎮める役目を与えられたらしい。

「い、一緒に行きます」

「僕も付き合っよ」

「あたしも行くわ」

コータ、孝、麗が沙耶に付いていくことになった。俺はクスリを塗るための部屋に戻るようになった。

俺はクスリを塗ってベッドで横になっていた。

『ひ・ま・だ』

寝転がりながら呟く。あれからクスリを塗って貰って部屋で暇を持て余していた。すると、

「入っていい」

ドアの方から声が聞こえた。

『どうぞ』

すると入って来たのは沙耶だった。どこか暗い表情で入って来た。

『どうした』

「さっき避難民に話しをしてきたわ」

『失敗だったか』

無言で頷く沙耶。

『頑張ったじゃん』

「えっ、でも失敗したのよ」

沙耶は驚いた顔で俺に言う。

『失敗とか成功とかじゃなくて、沙耶がどれだけやったかを俺は評

価したの』

寝ていた体を起こし沙耶を正面から見て言う。

『俺はお前のことを知ってるから結果だろうとそれまでの努力も関係ない・・・実行したかどうか俺には重要な、だからお前はやつたんだろ、ならいいじゃん』

沙耶が涙目で近付いて来る。その顔は緊張が完全に解けて子供の頃はよく見た顔、いつからか仮面を被ったか覚えていない。でも確かに覚えがある顔だった。

「はる」

沙耶はゆっくりと抱き付く。だが背中の方から泣き声が聞こえる。

『なんか久しぶりだな、昔は沙耶が泣きながらよく俺ん所に来てたな』

「知らないわよそんなこと」

むくれ声で言う。

『そのまんまの方がかわいいのに』

「無理よ、パパがあれだもの」

『ハハハ、確かにあれだからな』

そのまま俺達は暫しの会話を楽しんだ。

『そろそろ終わりかな』

「そうね、こんな日が続けばいいのに」

『沙耶が最初に言つたろ、無理なんだよ。また地獄に逆戻りだから。でもこんな世界すぐに終わらせる』

「ふふ、待つてるから」

沙耶の顔がだんだん近付いて来る。

『俺、他の娘にファーストキスあげちゃったぜ』

「壊れた世界なんだから、一夫多妻もいいじゃない」

言うが早いか沙耶と唇が重なる。沙耶の舌が俺の舌と絡まり、いやらしい音をたてる。そんなキスが長く続いた。気付くと俺は沙耶を押し倒していた。

『沙耶これからまた仮面を被るんだな』

「ええ、みんなにこんな知られたくないから」

『ホント、かわいいよ』

その後は沙耶が部屋から出て行ってブーツと外を眺めながら、これからはまた仮面の下沙耶を見た事に若干の優越感に浸る。



第12話 結果も努力も関係なく決断の方が大事かも（後書き）

苦情の感想が来る気がするのは作者だけかな？

でも作者は頑張りまする！

次回もよろしく願いつかまつる！

**第13話 旅立つ時はハンカチを忘れずに！（前書き）**

どうも、久しぶりですなんかアクセス数ユニークの累計が1万5千越えしてました。

これからも投稿ががんばりたいと思います。

### 第13話 旅立つ時はハンカチを忘れずに！

『うしつ、完全回復したな。そろそろ孝も準備が終わるだろ』

鞆を持ち屋敷の外にでる。すると松戸<sup>マツド</sup>さんと一緒にみんなが居た。孝とマツドさん、コートが笑い合っていた。

『どうしたんだ』

近くの沙耶に理由を尋ねる。

「パパが孝達に乗り物をあげたのよ」

沙耶が簡単に説明すると、孝達に話しかける。

「本当に行くワケ」

「・・・僕と麗の親だからな沙耶たちには迷惑はかけられないよ。それにたまたま沙耶の家が近かったからだ、覚えてるだろ」

『それに「さよなら」「じゃねーしな』

そこに割り込む俺。

『俺も孝達に付いて行くからな、大丈夫だ』

「え、でも悪いだろ」

『なんだよ今更だな、俺はお前の手伝いするんだ。感謝しろよ』

その一言で孝は納得した。すると後ろからありすちゃんが冴子さんの名前を呼ぶのが聞こえたので振り返ろうとすると麗と沙耶に阻まれた。

「「晴は見なくていいの」」

『なんでさ』

その後まともに振り返れなかった、でも冴子さんも一緒に行く事になった・・・らしい。すると、

「やった、やった」

先生が飛び跳ねて友達のケーバンを思い出したらしく、孝にケータイを借りようとするとき、麗が走り出す。

「麗どうし・・・そんな・・・あれは」

走りだした麗の先には紫藤たち一行が居た。その近くに走り寄ると話が耳に入る。

「・・・そして私はわかる、成績を操作できるのはあなただけだって。でも我慢してた。お父さんの捜査がうまくいけば、あんたも”紫藤議員”も逮捕できると聞かされていたから」

麗の銃の先のナイフが紫藤の頬に当たり血が垂れる。それよりも俺は”紫藤議員”のフリーズに驚きその後の会話は聞き取れなかった・・・アイツが俺の・・・

「…………でも…………もう…………」

俺は麗の銃を掴み下に降ろす。

「退いて、晴」

低い声で言われるが気にせず、口を開く。

『…………紫藤、あんた…………紫藤一郎の息子なのか』

俺は周りからは見えなように下を向いている。

「え…………ええ、私の父です、それがどうかしたのですか」

そうか、コイツがおれの…………

『…………東雲、俺の苗字に聞き覚えありませんか』

「い、いえ全くありませんね」

『それでは…………東雲 巧たくみに聞き覚えありますよね』

「つ…………まさか、君は…………」

紫藤は額から汗出しながら後ずさりし始める。

『東雲巧、俺の親父、かつてあんたの親父に殺された男の名前だ』

『俺の親父はアンタの親父が汚職してる事を知ってた、だからその

事を公表しようとした。そんな時アンタの親父の部下に階段から突き落されて即死・・・覚えてる筈だ・・・なんせお前等が殺したんだからな』

「あ、あれは、私のせいでは・・・」

『同じだ、お前は知ってて止めなかったんだ』

握る拳に力が入る。齒を食いしばり何かを堪える。

「ならば、殺すがいい」

振りかえると高城の父親が歩み出て刀を俺の前に差し出す。俺はそれを引き抜き構える。

「し、東雲君、やめましょうこんなの・・・」

『黙れ』

大声でそう叫び、刀を構える。

「ひつ、ひひひひひ」

刀を振る。

「がはっ」

峰打ちで横腹を思いっきり叩く。

『俺は・・・アンタ等を許せない・・・だけど同じ方法で贖いをさせても・・・親父は戻って来ない、喜びはしない、だから・・・アンタには生きて地獄を味わえ・・・それとこれは麗の分だ』

もう一度峰で背中を叩く。刀を鞘に納め沙耶の父親に渡す。

「それが君の選択か」

『はい』

そしてみんなの所に向かう。まず麗に話しかける。

『麗、その、邪魔して、うおっ』

麗が急に抱きついて来る。それをかるうじで受け止める。

「ありがと、晴」

その後は孝、沙耶、コータ、先生、冴子さん、ジークの順で声を掛けてくれた。ジークは声を掛けたと言うか顔を舐めただけが。

「せんせい、お電話かけるんじゃないの」

ありすちゃんの一言に先生が孝にケータイを借りて電話をかけ始める。

「あーリカあ、生きてたねー。あたしもいろいろと大変だったんだけど・・・あそこはもうダメ、あ、鉄砲とか借りちゃって・・・」

先生の電話光景を見ると、上空で何かが光るのが見えた。すると急に周りがざわめき始める。

「小室くん・・・ケータイ壊れちゃった、もしかしたら私が壊したのかも、ごめ〜ん」

「え〜〜〜っ」

「どうかしらね・・・まさかこんな時に・・・」

沙耶が何かを呟くと、コータが沙耶に言う。

「どうしたんですか、沙耶さん」

「アンタは関係ないはず、いいから見張ってなさい」

そう言うつと麗の方に歩み寄るとドットサイトを覗かせる。

「んつと・・・見えない・・・」

すると沙耶が叫ぶ。

「パパ、計画を立て直さないとダメ、これはきつと・・・」

沙耶の言葉を遮る様に銃声が響き、男の人が門の所で 奴ら に襲われるのが見える。だが 奴ら は頭を撃ち抜かれる。

『当たったよ』

手に持った銃で撃つと見事にヘッドショットが決まった。

「試射無しで、僕より遠い距離を一発」

「へえー凄いのね、晴くん」

コータと先生は声をかけてくれたが、他のみんなは驚いて声が出なかったり、感心して頷いてたり、頬を若干染めて何かを呟いていた。

「門を閉じよ。急げ、警備班集合、死人どもを中にいれるな」

「会長、それでは外にいる者たちを見捨てることに」

「今閉じねば全てを失う。やれ」

沙耶の父親が迅速な指示を出し門が閉じられ様とするがリモコンが反応せず手動で閉める、すると一匹入ってくる。

「な、何してんのよ、銃持ってたから早く殺しなさいよ」

コートに向かいそう言つとコートは撃ち殺す。すると沙耶の母親がスカートの裾を破き銃を装備する。

「アンタは見なくていいの」

「晴、見たらダメだからね」

「東雲君、見れば刀の錆になるぞ」

沙耶には見たら殺すつて目で見られ、麗には背中から銃剣を突き付けられ、冴子さんには刀の刃を目の前にチラつかされた。

『はっははは』

俺には笑う事しかできずにすぐ背中を向けた。

「お使いなさい沙耶ちゃん」

背を向けて居るので声しか聞き取れない。

「る、るがーP08、ストックとドラムマガジンまで」

コータの声のキラキラした聞こえた。

「こんなの使い方分かんないわよ。だいたいなんでママまで銃を持つてるの」

「ウォール街で働いてた頃、エグゼクティブの護身コースに通ってたもの。弾当てるのパパより上手いかもね」

なぜかみんなの頭に浮かぶ光景が一致した気がした。

「撃ち方はあなたが教えてあげてくださるわね、平野くん」

「はいはい、ははははい」

『それにしても、いきなり機械とかケータイが一気に使え無くなっただんだ』

「たしか妙な光の後だよな」

「電磁パルス攻撃（EMP）」

後ろから沙耶の声が聞こえて振りかえると説明をはじめ。

「N A N E・・・高々度核爆発とも言っわ。大気圏上層で核弾頭

を爆発させるとガンマ線が大気分子から電子をはじき出すコンプトン効果起きる。飛ばされた電子は地球磁場に捕まって広範囲へ放射される電磁パルスが発生させる。その効果は電子装置にとって致命的、アンテナとなりうる物から伝わった電磁パルスで集積回路が灼けてしまう」

「つまり今、我々は……」

「そう電子機器は使えない」

「えっ、じゃあケータイとか使えないの」

「ケータイどころかコンピューターもまず全滅、電子制御を取り入れる自動車もともに動かないたぶん発電所もダメ、EMP対策を取ってるとしたら別だけど……そんなの自衛隊と政府機関のごく一部だけのはず」

沙耶の父親が直す方法を聞く。

「灼けた部品を変えたら動く車はあるかも。たまたま電磁パルスの影響が少なく壊れて無い車がある可能性も……もちろんクラッシュカーは動くわ」

「直ぐに調べろ」

部下に指示を出すと部下は走り出す。すると、

「沙耶っ」

「え、何」

「この騒ぎの中でよく冷静に物を見た褒めてやる」

すると門の方から大きな音がする。見ると 奴らが門に体当たりを始める。すると門が押し倒され奴らが敷地内に入り込む。

俺達はこの状況に馴れていたのかも知れない。たぶん俺は馴れてしまっていた。この無限地獄に、この狂っている世界に……

第13話 旅立つ時はハンカチを忘れずに！（後書き）

久しぶりに書く結構キツイですなんかパソコンの方がスムーズに書ける気がする作者です

ケータイだとチマチマしてて面倒くさく感じました。

これからこの原作の単行本がでるまで更新が滞ると思うので新しく何かを題材に書きたいと思うんですが、なにを書くか思案中です。

何かいいのありませんかね。

今回はアンケートを取るかもです、これからも見て下さい！！

第14話 夜にエアコンを付けると安い!! (前書き)

どもっ、作者のザンです。

今まで投稿出来ずに済みません。

謝罪や弁解は後書きにてさせていただきますので

先ずは本編をご覧ください！

## 第14話 夜にエアコンを付けると安い！！

「奴ら あつちに引きつけられてる」

俺達はマッドさんの整備したバギーに乗り走り出し何とか門を抜けた。

「どこから外へ逃げるの」

麗が言うつと冴子さんが当たり前と言つように。

「あそこしかあるまいよ」

そこにはバスとコンクリートブロックの隙間が目に入る。

「狭すぎるわ」

「先生ムリよ」

麗と先生がムリと言っているがここ以外出る所が無い、だから孝が先生と運転を変える。

「小室君、運動会の障害物競争では何位だった」

冴子さんが突然質問する、すると孝の口の端が吊り上がる、それでも目の前の隙間が迫る。

「ビリから二番目」

バギーのアクセルを目一杯上げ隙間を抜ける。

「孝、嘘言つなよお前ビリだったじゃん」

「違う、あれは晴がズルしたせいだろ」

「ズルなんかしてねーよ、お前が勝手に俺に引っ掛かって転んだんだろ」

「ぐっ」

俺達の喧嘩とも言える言い合いにみんなは少し笑い合う。

「んでっ、これからどうする」

孝との言い争いが終わり孝に聞く。

「悪いけど麗と僕の親捜しに付き合って貰います、麗と僕の家、東署、新床第三小学校の順で、このまま走れば2時間もかかりません、そのあとは……先生の友達も」

孝が近い順に探す場所を言う、最後に先生の友達を入れたのはさっきの電話で生きている事を確認できたからだろう、その言葉を聞いた先生は嬉しそうな表情になる。

「間もなく国道だ」

国道を左に曲がるとそこには、街中から煙はたち、見える範囲の車

は確実に壊れ血が付いていた、奴らは目を開けば目の端には必ず映る、そんな光景が眼前に広がっていた。

「どうしろってんだよ」

「当然だし」

孝が呟くと沙耶がそれを知っていたかの様に声を大きくして言う。

「どうしたんですか高城さん」

コータが引き攣った笑みで聞くと沙耶は腕を組んで自信満々に言う。

「本当に鉄砲撃つ以外取り柄がないのね、でぶちん、奴らは音に反応する。そしてEMP攻撃は街中から人間とその技術が作り出していた大きな音を消し去ったワケ、アタシのパパ達はそうしたなかダイナマイトまで使った」

「そしてアタシたちもバギーの音を響かせている、恐らくこの街でただ1つのエンジン音を」

沙耶の話が終わり今まで聞いてた冴子さんが口を開く。

「納得はいった・・・だが、いま問題になっているのは、この場をどう切り抜けるかだよ」

沙耶の説明は俺でも理解できた、でもどうするのかの問題は解決していない。

「このバギー水陸両用よね、水に入ればいいのよ、奴らは水に

入れないじゃない」

麗が思いついた様に言う。

「松戸さんに聞いたんだけど、この人数じゃ浮くかどうかアヤシイそうだ」

孝の言葉に麗は落胆の表情になる。

「どうするつもりよ」

「……引き付け……過ぎたか」

あれからバギーを囿に他のみんなは歩いて後で合流する手はずになった、そして現在俺と冴子さんは土手の上まで多くの 奴ら の惹き付けに成功した、別れる時なぜか麗と沙耶に冴子さんに手を出すとか約束は守れとか色々怒られた、でも最後に2人共心配そうな目で見られた。

「東雲君、君はヤルことが極端過ぎるよ」

「すいませーん」

「そろそろかな、私はいつでもいいよ」

冴子さんの言葉を聞いてハンドルを握る力が強くなる。

「行きます」

手元のアクセルを捻り坂を下りる、 奴らは土手下まで転げ落ちた。

「俺より極端な気がします」

「ふふ、かもな、だが結局は同じか」

転げ落ちた 奴らはボキボキと音を立てながらまた起き上る。

「都合よくって感じには行きませんね」

そして川にバギーを走らせ飛び込む、すると水飛沫で服が濡れる。

「冷たっ、冴子さんぶじ・・・で・・・」

振り返り冴子さんの安否を確認しようとする、水も滴るなんとやら、冴子さんの服がビショ濡れで下着が微かに見える、俺の目は釘付けになる。

「私も女だぞ・・・」

俺の視線に気付くと顔を赤らめ胸の辺り腕をクロスさせ隠す、俺はすぐさま前を見るが素晴らしい光景が頭から離れない。

岸に 奴らが集まるのを確認するとバギーのエンジンを切る、バ

ギーは川の流れに乗り少しずつ下流に流れる。

「これでひと段落ですね」

「これからどうするのだ」

冴子さんの顔が俺の耳元まで近寄る、その時少しドキツとしたが、その後ビックリする冴子さんの胸が俺の背中に当たる感触が伝わったからである。

「そ、そうですね、ああの中州に止めて時間が経つのを待ちましょう」

若干動揺しつつもハンドルが曲げ中州に乗り上げる、濡れた上着を脱ぎ川岸を見ると 奴らが土手からだんだん数を減らすのが分かる、すると後ろから可愛らしいくしゃみが聞こえた、振り返ると冴子さんが着替えずにバギーに腰掛けて居た。

「す、すまない・・・身体が冷えてしまったようだ、しかし荷物を持ち出す暇が無かったから・・・」

寒そうに自分の体を抱きながら言う、俺は自分の鞆から急いで先輩に服を渡す。

「とりあえず乾くまでこれ、着ててください」

「ありがとう」

俺はすぐに背を向け着替え終わるのを待っていると。

「もついいよ」

そう言われ振り返ると、タンクトップ姿で髪をポニーテールにしている冴子さんがいた、その姿に一瞬見とれてしまった、それに気付いた冴子さんの仕草はまた格別・・・いけねっ。

「どこか変だろうか」

自覚が無いのかキョトンとした顔で言う。

「いやっ、変じゃ無いですけど、その、何と言っか・・・似合ってます」

あたふたしながら思い付いた答えはこれしかなかった。

「君も小室君も私を女として見てくれる」

「嫌なんですか」

「嫌いではない、私は女だよ」

その後は少しこれからの事や現状確認、脱線して楽しい談笑をした、会話が少し止むと冴子さんは時折寂しそうな面持ちで空を見て居た。

アレから服は直ぐに乾き、俺達は合流地点を目指しまたバギーに乗

り走りだした、暫く走るとまた 奴ら が道のあちこちに居る。

「これでは中州に逃げ込む前と同じだぞ」

「そうですね……あつ、そうだ」

そう言つてハンドルを右に曲げ突当たりを曲がると公園が見えて来る。

「公園」

そのまま公園の中央に向かつてバギーを走らせる、公園内は 奴ら がかなりの数集まっていた、そのまま中央にある噴水に入る、少量ながらも水が冴子さんに掛かる。

「君は女を濡れネズミにする趣味でもあるのか」

「たまたまですよ、それよりバックからテープを取って下さい」

冴子さんは若干ご立腹気味だがテープを俺に渡した、それでアクセルを全開にしてテープで固定する、バギーは当然噴水の中をグルグル回り始める。

「なるほど……音で引き付けてその間に……」

「はい、ここから東側の出口が近いから、そこから出ましょう、なるべく銃は使いたくないんで」

「なるほど……承知した」

言うが早いか冴子さんは『村田刀』を抜刀して 奴ら に切りかかる、俺もバツクと銃を肩に掛けバギーに積んでいた木刀を構え近くの 奴ら の頭を叩き割る、俺は目の端で刀で首と身体が切り離された者や顎から上が無い者を作り出す冴子さんの生き生きした姿が見えた……。これぞ『水を得た魚』と言うやつだと思った。

「凄過ぎだぜ、冴子さん」

ポツリと呟く、それからまたバツバツと切り殺して行く冴子さんその手が止まる、視線を向けると子供の 奴ら がいた。

「どうしたんですか冴子さん」

つい声を荒げてしまいがちに出来ない迫る 奴ら を吹き飛ばして冴子さんの下に駆け寄り子供の 奴ら を吹き飛ばす。

「くそつ、こつちです」

冴子さんの手を引き公園を出る、だが 奴ら がダンダン増え始める、一々倒していられ無いので木刀で受け流したり来る前に突いて倒したりして進む、途中冴子さんを見るが意気消沈と言った感じで戦える状態じゃない、そんな事を考えながら進むと鳥居が目に入る。

「おつ、ローソクだ、これで暗闇で過さないで済みそうだ」

俺達は一且神社の境内の中で夜を過ごす事にした、冴子さんは隅で体育座りしている。

「冴子さん、そんなところに居たら身体冷えますよ、こっちに座ってください」

バックの中にあつた寝袋を敷くと冴子さんがこっちに寄つて来ると口を開く。

「……何もたずねないのだな」

「貴方も俺も人です、それなりの理由があるはずです……言うまで待つ甲斐性は持つてるつもりですけど」

「ふふふ、そうだな、君になんの意味も無い話だが、聴いて貰えるだろうか」

「話すんなら聞きますよ」

すると冴子さんは一呼吸置くとおもむろに話始める。

第14話 夜にエアコンを付けると安い！！（後書き）

どうでしたか？

ほぼ一カ月も更新が滞ってすみません！

えゝ弁解と言う言い訳と相方との経緯です

夏バテらしきモノでやる気を削がれ

炎天下の中ほぼ毎日部活に狩り出されHPを限界寸前まで減らされ  
何度死にかけた事やら

夏休みが終わり直ぐにテスト

その後も夏休みの休みが恋しくなりパソコンに向き合えず仕舞い

こんなダメ作者の救世主が推参！

今の食べられる野草（以下食べ草）です。

前から興味があったらしく、「組んでみる？」と聞くと

案外早めにOKを貰い今に至ります。

これからは食べ草も作品を書く予定です

ですからこれからもよろしく願います。

それからこの小説は一時休止させていただきたいと思います

ですがいつか・・・と言うか原作が進むまでのご辛抱をお願いいたします。

## アンケート

どうも皆さんこんにちは、こんばんわはたまたおはようございます。

えー今回はアンケートです、現在凍結中の小説に代わる新たな小説を書こうと思ったんで

すが……

作者ことザンの足りない頭では何を書けばいいのやらと悩んでいた時……「読者に聞い

ちやえばよくね?」と思い至ったのです。

では皆さん俺にネタと勇気とほんの少しの優しさを~~~~!!!!

ですがこの決断には作者の今後にも関わる重要な事・・・ですが  
皆さまを信じ若輩者のザ

ンですが読者の皆様の一存に掛けます!!!

コードギアス・・・悲しい筈がなぜか笑いが・・・原作がどこまで原型を留めるか見物だな

## 二つ目

魔法先生ネギま！・・・ネギの従者としてネギパーティーに参加だぜ・・・なんか牛歩更新確定モノの話がしっかり出来ない不完全

## 三つ目

真・恋姫無双・・・恋姫達とイチャラブに走るぜ・・・プレイしたことが皆無、でもかなり好きな作品でもある

## 四つ目

真剣で私に恋しなさい・・・最強の名を欲しいままに手に入れる・・・これもプレイ皆無、現在資料をかき集め中

## 五つ目

名前が思いつかん・・・にゃんこい、エデンの檻、working  
荒川アンダー、マケン姫、ディーふらぐ、ながされて藍蘭島、セキ  
レイ、トリアージX、紅 kurenai、とある魔術・科学  
etc・・・かけるか不安だが頑張りたい。

## 六つ目

オリジナル・・・ザンと食べ草で共同制作・・・企画段階まで進  
行中

## 七つ目

読者の希望・・・読者の皆様が書いて欲しい二次小説を投稿・・・  
これで君も真のオタクに近付けるかも

## 八つ目

短編集・・・読者の皆様が好きな作品の短編を書いて投稿・・・  
君も将来優秀で立派な小説家候補になれるかも

## 九つ目

禁術・・・もう作品投稿禁止、名付けて「凍結捕縛封印」・・・  
作者自体が凍結してしまえと作者をユーザーから消去・・・【こ  
れは絶対しません】

期限は1週間にしますが伸ばしたり短くしたりするかもしれません  
その辺りはご了承を

お願い致します。

では約1週間後に”活動報告”にてお知らせいたします。

これからもごひいきにー！      再見！！



マジ恋 お試し (前書き)

暇なので書いてみた。

大和視点進行 (悪魔で今回は)

## マジ恋 お試し

「・・・・・・・・」

めちゃくちゃ清々しい朝、俺こと直江<sup>やあえ</sup> 大和<sup>やまと</sup>は起床。

「・・・・・・・・」

なんだ幻覚か？

起きると腹に重みを感じ布団をめくると・・・

「・・・・・・・・」

榊原<sup>さかきはら</sup> 小雪<sup>こゆき</sup>。2 - F所属で俺と同じ風間ファミリーの一員である彼女の寝顔が目の前にあった・・・

「大和、おは・・・・・・・・」

そしてこのタイミングでドアが開き少女が入って来る、ドアを半開けでコチラを変な目で見ると彼女は小雪改めユキと同じく2 - F所属で風間ファミリーの椎名<sup>しいな</sup> 京<sup>みや</sup>。幼少期に家庭の事情で痩せ細った彼女があることがきっかけで助けたことでファミリーのとある一員に惚れ現在はファミリーの一員である。

「大和がオオカミになっちゃった・・・」

「待て京、どう見ても襲われてる側だろ」

「そんなこと置いといて早く起きて、朝ご飯できてる」

「置くなよ・・・まあいい起きるか、おいユキ起きろ」

京はそう言つと部屋を後にする今だに腹の上で寝ているユキを強めに揺すり起こす

「・・・女の子は優しくしなきゃダメなんだぞ・・・zzzzz」

「寝言で適切なこと言っな！」

その後ユキを起こし制服に着替えようとすると。今度は口ボが入つて来る。

「やあ、お目覚めかい大和」

「クッキーまた人の部屋に勝手に入るな・・・」

「あーあ、布団がグチャグチャだよ」

「朝から口ボが小言を言っな」

「なんでそんな事言っんだよ、ボクはオマエのことと思って言ってるんじゃないか！」

激怒するこのロボはクッキー、世界の九鬼財閥が開発した最先端技術の結晶……らしい……そして

「あまり舐めたことを言っていると切り刻むぞ」

変形する……基本卵型の丸っこい形が急にスマートになる

「いちいち変形するな、まったく無駄にハイテクめ」

そのあと洗顔し着替えて、ヤドカリのヤドンとカリンに挨拶をして朝ごはんを食べに食堂に向かうとこの島津寮を営む島津麗子さんと出会う。

「おう、大和ちゃんおはよう」

「おはようございます、相変わらず名前がおり美しいですね」

そう言うお世辞と分かりつつも気分を良くした麗子さんは朝食にタマゴを追加してくれた。

「あつ、お、おはよう……ございます!」

いきなり気合いの入った挨拶をしてくるこの娘は、1-C所属の黛由紀江ゆきえそしてなぜか帯刀している。

そしてみんなで食事をはじめ、2人を除いて。

「キャンプと龍也、またいないね」

「マイスターなら、土曜の夜から外出中だよ」

「あの2人、今度はどこ行っただよ・・・」

キャンプこと風間 翔一。かざま しょういち 2・F所属の風間ファミリーのリーダーで放浪癖があるがいつものことなので放置。

「チッ、起きんのが遅えんだよテメエは」

ここで舌打ちをした彼は源 忠勝。みなもと ただかつ 通称ゲンさん、同じく2・Fで新ジャンルの健康的な不良を開拓した人、そして見た目に反して優しくツンデレだ

みんなでわいわいとまでは行かないが会話をしながら食事を済ませる、ゲンさんは登校時間になると1人で先に行ってしまった。島津寮の隣の島津家から麗子さんに急かされ1人の学生が出て来る。

「やあ名前負け」

「いきなりケンカ売ってんのかテメエー」

島津 岳人。しまづ かくと 2・F所属で麗子さんの息子、筋トレが趣味で自分の

筋肉が自慢、女の子にガツつく悪い癖がありエロの権化だ・・・

「冗談だ。今日もかつこいいぞ」

「よせやいいきなりホントのことを」

バカで扱いやすいほど単純。しかしいつにもまして扱いやすい。

「どうだ京。今日の俺様いつもよりイケてるだろ」

「具体的にどこが？」

「ムダメツチヨー」

「ムダじゃねー！・・・髪型とか、ビシッて決まってメスホイホイだろ」

「変化なしだね」

「はんつ、俺様はお前が心配だぜ京ちゃんよお」

「なにその不快な上から目線」

「ふかいふかい」

「ユキータちゃちやち入れんな・・・それより、男の大和でさえ俺様のもてオーラ感じてんのに」

「なに言ってるんのウソに決まってんじゃない、バカかよ」

「ガクトの頭が心配だ。将来大丈夫かな」

「心配だ」

「なんだこの幼馴染たち容赦ねえー！！」

4人で多馬川沿いを歩いて登校。春の日差しが心地いい。

「やー」

今日発売の週刊ジャソプを読みながら歩いて来る男が来る。

「おはようもろおか師岡 卓也。たくや2 - F所属趣味マンガやネット」

この片目を髪で隠し如何にも運動が出来無さそうな男。師岡卓也、通称モロが合流する。

「えらく説明的だねえ」

「モロは影薄いから存在確認しないと忘れそうで」

「朝一で酷い事言わないでよ！、しかも京に影薄いとか言われたくない！」

「影ウスゝモロ」

「ユキもやめてよ！」

そしてガクトとエツチな漫画を読み始める。そんなこんなで川沿いを進むと前方に人だかりが出来ている。

「なの騒ぎだ？」

見るからに不良な男集団12、3人が屋台と男女2人をグルリと囲んでいる。しかも男達はバットや鉄パイプで武装している。

周りの川神学園生徒は誰も助けようとせず、むしろワクワクした目でみている。

「これは朝から大ピンチ」

「ピンチピンチ」

「楽しそうだねユキ、でも早く止めないと大変な事になっちゃうよコレ」

「そんな事言ってる間に始まった」

その後は地獄だー（不良たちにとって）、2人の男女により関節を外されテトリスの様に組み上げられて行き最後に姉さんが回し蹴りを叩き込みテトリス？を崩す。すでに一種のホラーである。

その崩れた関節が外れた不良が転がる中2人はそこに居た・・・鬼神と武神・・・その圧倒的な強さはまさに鬼神と武神に相応しいこの女性は川神かわかみ百代ももよ。武術の世界に置いて知らないモノは居ない川神てっしん鉄心の孫娘でとても強く、風間ファミリーの中で唯一年上だ。そして男性の方は、2-F所属の焰ほむら龍也たつや。姉さんとチー

ムを組む最強の男、自分の屋台を持ち放課後や昼休みに偶に自営業を営む奴でエレガンテ・クアットの1人、京の意中の相手。

「ああーン、今日もモモ先輩もタツちゃんも超かつこいい！」

「この無敵さがたまらない系ー！」

女子はキヤーキヤー騒いでいた。

「さすがモモ先輩、まさに霸王だぜー！」

「タツの奴もカツコ良過ぎだぜっ！」

「あの2人は最強のコンビだぜー！」

・・・男子もキヤーキヤー騒いでた。

「相変わらずの滅茶苦茶さだ」

「1人1発ずつ蹴り入れてたね」

「そ、そうだな。スゲー蹴りだった」

「ウソ、実はパンチ。龍也は両方」

「京てめえー」

「・・・ガクトでさえ見えて無かったんだね、それにしても京はよく見えたね」

「弓使いは目がいいと相場が決まっています。ちなみに、モモ先輩は一番不快な笑い方をした丸顔の男には顔面への強打の他に、腹部に3発いれてた」

「8発だー京、まだまだ甘いなー」

そう言つて近付いて来る姉さんと屋台を引っ張つて来る龍也。

「いやっ俺は16発叩きこんだ」

「じゅ、16発・・・凄過ぎるぜ龍也。こんな奴が幼馴染なんて、俺様自信無くしそうだぜ」

「そんなのドブにすてなよ、ムリだから」

「ムリムリ」

「ふふふ、カワイイなさつき1年、見たか顔を真っ赤にして」

満足そうな顔で自慢する。先程の女子の集団でいい収穫があったらしい。

「見たかじゃねえよ、モモ先輩！」

「なん？」

「いつも可愛い子もって行きすぎ！、俺にも回してくれよ」

「嫌だね、欲しけりや自分で調達すればいいだろ。まあ可愛ければ略奪するがな、ふふふ」

不敵な笑みを浮かべる姉さんに、涙を流すガクト。

「美人の女好きって超もったいねえよ・・・」

「おいおい私は根っからの女好きってわけじゃないんだぞガクト。ただ周りの男が龍也以外魅力無くちゃ。女の子にもちよっかい出ささ」

「その割に俺へのちよっかい出した回数少なくてね？」

「なんだ構って欲しいのか？」

姉さんの目が光、龍也の胸に顔を押し当てて。

「・・・これはー・・・甘えてると言うのでは？」

「いいんだこれで、ふふふ」

姉さんは気持ち良さそうに顔を押し当てている。

「ふふ、タツヤ。好き」

「京、唐突過ぎて意味が不明だ」

「えへへー、タツヤー」

京、ユキも龍也に抱き付き一種の力オスが出来上がる。

「そろそろ行かないと遅刻になるぞ」

「くそーなんでだー!!」

「はは、いつもと変わらないね」

「モモ先輩早くしないと遅刻だぞ」

そして俺達は登校して行くと多馬大橋に到着。渡った反対側に行けば川神学園がある。この橋、別名変態の橋と言われている。

「みんなー！おはよー！ー！！」

元気な挨拶と共に現れたのは川神 かずこ 一子。趣味は体を鍛えること、好きな食べ物は肉と言う現代女子としては異形の女の子。

「おはよう」

「や」

「ワン子おはよ」

「おうワン子」

「おはようワン子」

「川沿いに大勢伸びてたけど、タツとお姉様？」

どうやら川沿いの惨状を見て来たらしい。

「ああ、つまらない相手だったな」

「もっと骨の位置をずらすべきだったな」

「お前は鬼か！」

「うゝんそうじゃね？」

「否定しなよ！」

「あはっ、やっぱり凄いや」

「そう言えばワン子今日はタイヤ2つか？」

「うん、その分川沿いに東京都まで行ってきたよ」

「昨日は静岡まで行ったのに、元気だね・・・」

「アタシはタツやお姉様に比べるとまだまだだから」

「大丈夫だ努力は人を裏切らない、日々精進これ強者の基本」

龍也はワン子の頭を撫でながら笑顔で言う。後ろでは姉さんがなぜか真面目な顔で2人を見ている。

「にえへへへ」

ワン子が既に骨抜き状態だ。

「ちようちよ」

「待てユキ！、蝶蝶を追いかけて道路に出るな！」

ユキは相変わらず自由で蝶蝶を追いかけて道路に出ようとするのを  
ワン子の頭を撫でていた龍也が即座に襟を捕まえ持ち上げる。

「うータツのケチー」

「あぶねー事すんなつの」

ふうーとため息をつく龍也。そのまま俺達とワン子は普通に歩いて  
登校する・・・タイヤを引きずりながら。

「歩く時くらいトレーニングよそうぜ」

「アタシはいかなる時でも鍛える事を忘れないのサ」

「タイヤを引っ張る娘と歩くこっちが恥ずかしい」

「この内気、だからアンタはモロなのよ」

「師岡は生まれついでの名前なんだよ！、否定しないでよ！」

「内気で陰気なモロ」

「ユキまでやめてよ！」

「こうして鍛えていれば、強くなるだけでなく。体もお姉様見たい

にバイーンとなるわけよ!」

無い胸を突き出しどや顔をする。

「スタイルでも並ぼうと?」

「うん、何をおいても、お姉様はアタシの目標。とりあえずお昼に牛乳飲むんだ!」

「それでも無理は無理だろ」

そう言つて姉さんを見る。しなやかに伸びた脚、無駄なく引き締まった体に激しく自己主張をする胸とキュッと括れたウエスト、流石学園最高の美女。同時に学園最強で無ければ言い寄る男も星の数居るんだろうな。

「やっぱりワン子には無理だ」

「なんですって!。いつか巨乳になって”おいおいお前の体は果物やか”とか言わせてやるわっ!」

「あははははは!」

「ナイスギャグ、合格」

「おい京に受けたぞ、はははは」

「バカ共笑うなー!、真剣<sup>マジ</sup>なのよ!」

「いやっ、今のは笑えるな。はははは!」

「なつ何よー・・・」

笑い続ける俺達にワン子はだんだんと声に覇気が無くなり泣きかはいってくる。

「よしよし、初奴め」

「初奴め」

龍也とユキが慰めに入り頭を撫でると即座に復活。

「余りワン子をいじめるな、シメルぞ」

「受けて立つ、ガクトが」

「なんで俺様に回って来るんだよ」

龍也がガクト素早く近付く。

「ドラゴン  
龍パンチ！」

「ユキちゃんキツク」

「妹キツク！」

「姉パンチ！」

「いつてええええ！」

龍也のアップパー、ユキのハイキック、ワンス子のローキック、姉さん  
の中段突きの流れる様なコンボが見事に繋がりガクトは倒れ込む。

「モテりるじゃんガクト」

・・・そんな騒がしい朝の平凡な登校風景。

マジ恋 お試し〜（後書き）

どうだろっ？

ネギま 試作（前書き）

書いちゃった・・・

なんとかなるかな？

## ネギま 試作

まだ冬の寒さが残る季節、ひんぎ 緋咲 悠ゆうは学校へ登校していた。

「ふあゝ、寝む」

まだ眠気が抜けずフラフラと道路中央を歩く。

「……zzzz……ンオッ」

悠は寝ながら歩く妙技をするが路面電車のレールにつまず躓きこける。

「……痛い……」

こんなマイペースを崩さないまま自分が授業を受けるべく”女子”  
中等部に向かう。

……さてこれは決して彼が望んだ事ではなく、学園長が中等部の  
共学化の為に彼が長い審議と言うかくじ引きで決まった……  
と言う噂があるがいまだ謎である。

そして彼はこの登校を約一年半ちよつと近く続けているためもうその  
話題も沈静化しつつあった、そんなこんなで教室に到着するなり  
机に突き伏す。

「・・・ZZZZZZ・・・」

「・・・っ・・・ゆ・・・ゆ・・・ゆ・・・悠ー」

誰かの声が聞こえ目を覚ます悠、そこには素敵なステキナ・・・拳があつた。

「グオツ」

拳骨、古来より人が何かしらの理由があり頭や他の部位にぶつける堅く握り締めた手を現す、その威力は扱う者の技術や力により変化するが・・・痛い

「全く人が何度も呼んでんのに」

いまだ痛い頭を押さえ目線をずらすとご立腹姿のアスナが居た、神か楽坂ぐらくさか 明日菜あすな。小1の頃からの付き合いの言わば幼馴染その2だ。

「・・・痛いよ、アーちゃん」

「何が痛いよ、ってかアーちゃん言っな」

「それで、どうしたのアスナ」

ようやく痛みが治まり眠気が拳骨で飛んだ。

「アンタなんで人の席で寝てんのよ」

「・・・あれ」

机を確認すると確かに自分のではなかった。

「・・・本能かな」

またもやアスナの拳骨が炸裂するがそれを難なく躲す。

「ふつまだま・・・グオツ」

二発目が頭を捉える。

「まだまだね」

勝ち誇った笑みを浮べるアスナ。

そんな朝の1つの光景があり今日は新任の先生が来ると報道部の朝倉くわくら和美かみが言っていたので2・Aはいつもより少し騒がしかった。ある者は歓迎のトラップを仕掛けたり、肉まんの押し売りだったり、カメラを磨きながらネタネタ言ってる奴がいる、そんな平和な朝。

「皆さん、そろそろ席に付いてください」

委員長こと雪広ゆきひろ あやか。委員長の称号を欲しいままにする品行方正、才色兼備で実家がお金持ちの幼稚園からの付き合いで幼馴染その1、その声でみんなが席に付き先生が来るのを待つ、コンコンとノックが聞こえ教室の前の扉が開く。

「失礼しま・・・」

見ると子供がタキシードを着て扉に手を掛けると、上から黒板消し（チョークの粉特盛り）が子供の頭に当たり粉が飛び散る、だが俺の目には黒板消しが一瞬だけ止まった気がしたがまだ寝ぼけていると決めつけてまた子供を見るとみんなが子供にビックリしている。

「えー、子供」

「君、大丈夫」

「ゴメン、てつきり新任の先生かと思って」

子供と分かるや否や気に掛け始める、するとしずな先生が手を叩き騒ぎを止める。

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ、さ、自己紹介して貰おうかしら、ネギ君」

「は、はい」

しずな先生が促すと子供先生は教卓まで行くと自己紹介を始める。

「ええと、あ・あの・・・ボク・・・ボク・・・」

これだけの人数に戸惑ったのか少しどもる。

「今日からこの学校でま・・・英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです、3学期の間だけですけどよろしくお願

います」

「「「「「.....」」」」」

少しの静寂が訪れるが。

「「「「「キャアアッア」」」」」

「「「「「カワイイ」」」」」

やっぱりみんな思った通りの反応を数人のクラスメートがネギ先生に迫り質問攻めにする、そのまま抱きついたり頼ずりしたりしずな先生の注意も耳に入らずかなり過激に歓迎をしていた、するとアスナがネギ先生を掴み上げ教卓に乗せる。

「ねえ、アンタさっき黒板消しに何かしなかった・・・何かおかしくない、アンタ」

アスナがネギ先生に質問をすると慌て始める、ネギ先生にさらに食って掛かるアスナ、そこに机を叩くあやかの姿があった。

「皆さん席に戻って、先生がお困りになってるでしょう」

さすが委員長長の称号を持つだけある、あの騒ぎを一瞬で解決してしまうのだから。

「アスナさんもその手を放したらどう・・・もつとも、あなたのみたない凶暴なおサルさんには、そのポーズがお似合いでしょうけど」

そこでアスナを逆撫でする事を言わなければ完璧なのに。

「なんですって、委員長なにいい子ぶってんのよ」

「あら……いい子なんだからいい子に見えてしまうのは当然でしょ」

委員長に恐ろしい睨みをきかせるアスナを嘲笑うかのように言い返す。

「何がいい子よ、このシヨタコン」

挑発するように禁句を口にするアスナに委員長が掴みかかり喧嘩が勃発する、それを周りは煽る、ネギ先生は必死に止めようとすることが取り合って貰えずあたふたする。

はあゝまたか、懲りねーなーしょうがねー止めるか。

「はいはい、そこまでー。アスナ、あやか2人ともストップねー」

取っ組み合いをする2人を引き剥がし襟元をもって持ち上げる、こんな感じで仲裁に入るのは数えるのも面倒なくらいある、この仲裁役は俺の定位置になっていた。

「ちよと悠、放しなさいよ」

「悠さん放してください、今日こそアスナさんと決着を……」

ジタバタと暴れるアスナとあやか。

「はいはい、決着はまた今度なー。今日は新任のネギ先生の授業を受けようなー」

そのまま騒ぎは収まりネギ先生の初授業が始まった、その授業中にアスナがネギ先生に悪戯？をしてなぜかあやかと喧嘩になったりしたがなんとか収集し初授業は終了した。

「なんで俺まで・・・」

現在俺とアスナでネギ先生の歓迎会の買い出しの帰り道。

「あそこで左を引いていれば」

俺は激しく後悔中だった・・・。

「いつまで言ってるのよ」

呆れた様に声を掛けるアスナを尻目に頂垂れる。

「それにしても今日のアスナ変じゃなかったか」

「別に普通よ、ただあのガキを家に泊めるのが不満よ」

「へえーネギ先生、アスナ達の部屋に泊まるんだな・・・いじめんなよ・・・」

「いじめて無いわよ、ただ気に食わないのよ」

そんな話をしながら校舎に向かう。すると視界にネギ先生が所持し

ていた杖を現在落下中の宮崎<sup>みやざき</sup> のどこに向ける、すると宮崎の身体が空中で一時停止する、その隙をを逃すまいとネギ先生は走り出し宮崎をキャッチする。

「・・・・・・・・・・」

その光景を目の当たりにして絶句した、そのまま凝視しているとネギ先生がこっちに気付き驚いている。

「あ・・アンタ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「あ・・いや、あの・・その・・」

時間が止まった様にその場にいる3人は凍りついた、するとアスナが走り出しネギ先生と杖を抱え近くの林に連れ込む、残された俺はのどかに近付くと目を覚ます。

「宮崎大丈夫か」

「う・・ひ、緋咲君・・」

「ああ、ケガとかねえーか」

「あつ、は・・い・・大丈夫・・です・・あ、ありがとう・・」

宮崎は顔を赤くして起き上る。

「そうかケガがなくて何よりだじゃあ俺行くから、そうだ助けたのネギ先生だから、じゃ」

おれはアスナが向かった方に走り出す、しばらく行くと声が聞こえそこを目指す。

「おい、アスナ……へ……」

そこにはブレザーに裸の奇抜なカツコのアスナが居た。

「あ……ひっ……いつ……いやあぁ~~~~~~~~」

「す、すまん……」

「す、すいません……」

あれからアスナが制服に着替えて校舎に向かう3人。

「記憶を消そうとしてパンツ消してしまいました……」

「記憶の方がよかったわよ……、魔法使いなら今すぐ時間戻しなさいよ……っ」

「俺まで被害にあわせるなよ、不可抗力で死ぬわー」

俺はあの後アスナにボコボコにされて死にかけた。

「見たアンタが悪いのよ」

理不尽だ凄く理不尽なことを言われた、だがここで言うともたボコられる。

「うひいっ」

そんな事を考えていると、アスナがネギ先生を掴み上げる。

「で、何でそのちびっ子魔法使いがこんな所まで来て・・・しかも先生なんてやることになるわけ・・・」

「俺も気になるな」

「そ、それは・・・修行のためです、『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』になるための・・・」

「なんだそれ」

「・・・は・・・」

俺とアスナは理解出来ない顔をする、するとネギ先生が説明を始める。

「え、え〜〜と、立派な魔法使いの仕事は世のため人のために陰ながらその力を使う。魔法界でも最も尊敬される立派な仕事の一つです」

「NGOとかそんな感じか」

「今はその仮免期間のようなもので」

「ふ~~~~ん・・・それで魔法が人にバレたらどーなんの」

涙目のネギ先生、なぜかこっちが悪い事をしている気になる俺。

「か・・・か、仮免没収の上、連れ戻されちゃいます~~~~、ひどいときはオコジョにされちゃて・・・だ・・・だだ、だからみんなには秘密に~~~~」

あうつとかいって錯乱状態のネギ先生を尻目にアスナは涙目ながら言う。

「ということは私のことの責任もちゃんとしてくれるんでしょうね」

「ホントに引き受けて大丈夫かネギ先生」

あれからネギ先生はアスナの要求をのみ責任をとる代わりに秘密にする事が決定した、そして教室に向かう途中の廊下である、アスナは教室に先に戻った。

「はい、元々僕が悪いんですだから当然です・・・それで・・・あの・・・」

「心配するな俺は人の不幸を楽しむ趣味はない」

ネギ先生の頭をポンポン叩く。

「は、はいありがとうございます」

嬉しそうに笑顔を向けるネギ先生。

「緋咲さんはなにか願いとかないんですか」

「ん、俺は、うん・・・特に無いな、あるならみんなが元気で  
ある事かな」

「緋咲さんって優しいんだすね」

「そうかな・・・いやそうかも、人の笑顔とか安心した顔見てるの  
以外に好きなんだ」

「僕も人の笑顔は好きです」

「それとネギ先生、俺の事苗字じゃなくて名前で呼んでよ」

「えっ、でも年上の人には敬語を使うのが日本の礼儀って」

「そんなに礼儀礼儀って気張らなくていいよ、心得として受け取る  
のがいいと思うよ」

「・・・はい、悠さん」

そのまましばらく歩くと教室に着き扉を開けるとクラッカーが鳴り

響く。

「『『『『『ようこそネギ先生』』』』』」

「・・・へ・・・」

ネギ先生は驚いて変な声が出る。

「これはネギ先生の歓迎会だよ」

「えー」

その後はネギを準備された机の真ん中に座らせ歓迎が始まる、飲み物や食べ物を勧めたり質問したりとそれに慌てながらも対応するネギ。

「まぐまぐまぐまぐ」

俺は一心不乱に食べ物をお口に運び胃に入れる。

「悠くんは相変わらず花より団子やな」

そんな俺に話しかけるアスナとルームメイトの近衛このえ 木乃香このか。京都に実家があり学園長の孫娘、品行方正で料理が得意。

「んぐんぐ・・・ぷはあ、どうしたんだ」

「いやなあ、一人で食べてるから話でもしよおもてな」

「そうか、木乃香はネギに質もn・・・」

「ユウー勝負アルー」

第一声が勝負ーのバトルジャンキーとも言える発言をする古<sup>く</sup>菲<sup>ふえい</sup>。中国武術研究会の部長で前回のウルティマホラの優勝者で我がクラスのバカレンジャーの一角。

「今木乃香と話してただろ、ちょっと待ってろ」

「むっそれはすまんかったアル」

「別にええよ、でも勝負ってなんなん」

さっきのクーの勝負発言に疑問を抱いた木乃香が質問をする。

「ああ、2年の初めのにクーの中国武術研究会で1回見学に行ったら目をつけられたんだ」

「へーそんなことあったんやね」

「それだけでは無いいでござる」

「急に会話に混ざるな楓」

「いやーユウが余りにも楽しそうだったのでつい会話に混ざってしまっただござる」

このござるが語尾に付く長瀬<sup>ながせ</sup>楓<sup>かえで</sup>。さんぽ部所属ののほーんとしたゆるい性格、自称忍び？でクーと同じくバカレンジャーの1人。

「ついで混ざるな」

「それよりそれだけやないってどついう事なん」

「うむ、拙者や他の部活にちよくちよく顔を出しては色々注目されていゝでござる」

「でもウチの部活には来てへんねー」

「別に行かないわけじゃない、うちの学園の部活が多いだけだ。それと帰っても暇なんだよだ、けど部活に入る気になれないからちよくちよく顔だして暇つぶしがてら1日体験見たいなのやってんだよ」

そう言うのと木乃香はそうなんやーと言う、そしてまた置いてある料理を食い始める。

「ユウはネギ坊主の歓迎に参加しないアルか」

「俺は・・・まぐ・・・来る時・・・んぐ・・・いろいろ質問・・・もぐ・・・したからな・・・まぐまぐ」

「しゃべる時くらい手止めるアルよ」

「むぐ・・・ムリだ・・・そろそろ・・・終わるからな」

その後も終わるまで俺は食いながら話しながら過ごした。

歓迎会の帰り道。

「・・・zzzzzz・・・」

「ちょ、コラ寝るな」

アスナに頭を軽く叩かれ（はた）軽く目を覚ます。

「寝ながら歩いたらあぶないえー」

「寝ながら歩けるんですか」

「・・・眠い・・・ムリ・・・」

木乃香は心配して俺に話しかける、ネギは俺の特殊スキルに驚いている。

「ホントに昔頃から危なっかしいんだから、ほら手握って」

「・・・ん・・・ありがと・・・」

アスナが若干顔を赤らめながら俺に手を差し伸べる、俺はその手を掴みアスナに引っ張られながら歩く。

「ほんま仲ええなー羨ましいわー」

「やめてよ木乃香こいつとはただの腐れ縁よ」

そんな感じで女子寮に到着すると俺はそのまま管理人用の部屋に連れて行かれアスナに布団を敷いて貰ったり洗濯物を洗濯機に入れて貰ったりと世話を焼いて貰っている中、完全に睡眠に入った。

ネギま 試作（後書き）

駄文だー・・・

悪魔で試作と割り切ってください。

い報告と謝罪・・・と予定。

誠に勝手ながらこの小説、

『俺よ、死んでも心をしっかりもて・・・ムリぽいけど』

この作品を作者自身で読みなおしたところ・・・

表現や関連性が悪かったり文章力に、

はっ、と自分でさえ鼻で笑う所が、所々あったので、

更新を打ち切り、新装版として新たに書きたいと思います。

作者の都合で勝手なことをしてしまい、

誠に申し訳ございません！

新装版の更新につきましては今の所未定です、

ここで明かしますが、自分学生なモノで・・・

部活とこの時期で大きなイベントの修学旅行で少しの間、

PCに向かえないので………すいません………

ですなるべく早めに更新したいと思います。

若しかしたら週末に出来るかも知れません………

これからもザンと野草を宜しく願っています!!

では後ほど!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9296m/>

---

俺よ、死んでも心をしっかりもて・・・ムリかいけど

2011年1月12日19時37分発行